

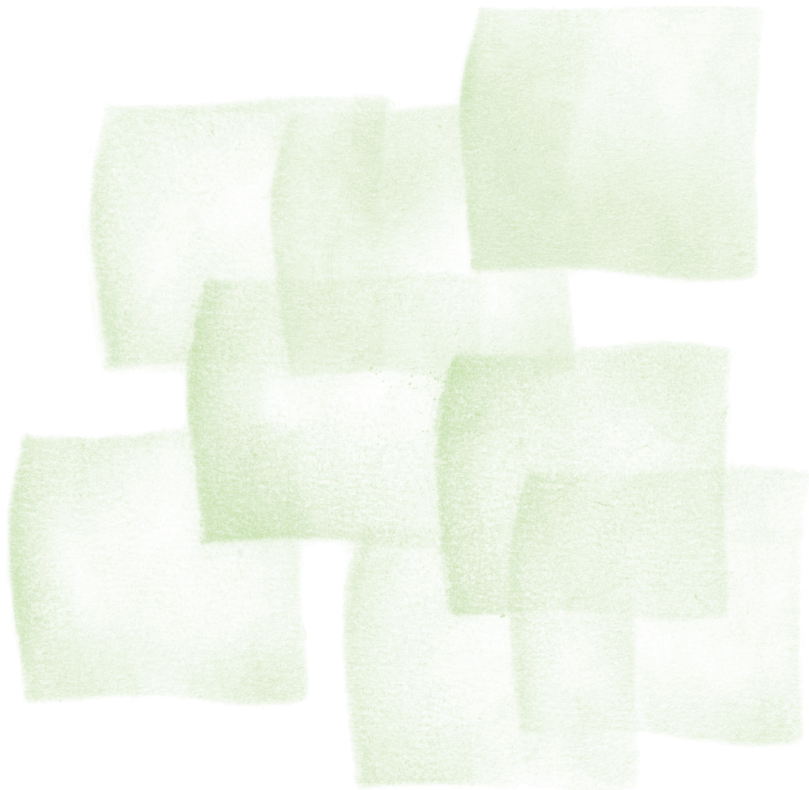
人文研ブックレット ④

移民を背景とする青少年の自己形成

—当事者の視点、支援者の視点、研究者の視点—

研究会チーム

「移民を背景とする青少年の人間形成に関する日欧比較研究
—学校から職業への移行に注目して—」



公開研究会

移民を背景とする青少年の自己形成

—当事者の視点、支援者の視点、研究者の視点—

研究会チーム

「移民を背景とする青少年の人間形成に関する日欧比較研究
—学校から職業への移行に着目して—」

日時 2021年11月7日（日）

形式 オンライン（Zoom）

主催 中央大学人文科学研究所

「人文研ブックレット」の発刊にあたり

人文科学研究所が主催した公開講演会、研究会、談話会、シンポジウムのうち、専攻を異にする研究員にとつても興味深く、研究者間の交流に役立つと思われる、例えば学際的領域を扱ったテーマのものを「人文研ブックレット」として発行することにしました。研究チームから提案のあった企画を含め、運営委員会が立案、実施した後、同委員会が審議のうえ決定したものをブックレットの対象としました。

研究所では、共同研究の成果を「紀要」、「叢書」として刊行していますが、人文科学の名で呼ばれる研究分野はあまりにも多岐であり、時に、研究チーム間の関係は疎遠になりがちです。日常の研究領域の枠を越える方へ我々を刺激してくれるこれら口頭による発表や報告も、研究所の重要な研究活動の一つと考えます。催しに出席できなかった研究員に、後日その内容を届けるのが目的ですが、同時に、口頭の発表であるために、おのずと専門語は敷衍され、読者は解説されたメッセージに直接ふれることになりまますから、一研究所の中だけではなく、多くの方々にも親しく読んでいただけるものと信じています。

一九九三年五月二二日

中央大学人文科学研究所

開会の挨拶

司会(森茂)・・それでは時間になりましたので、中央大学人文科学研究所主催公開シンポジウム「移民を背景とする青少年の自己形成―当事者の視点、支援者の視点、研究者の視点―」を始めさせていただきます。本日司会を務めます中央大学文学部の森茂岳雄です。よろしくお願い致します。

中央大学には、学部とは別にいくつかの研究所在置かれておりまして、学部を超えて、また外部の研究者の参加も得て共同研究チームをつくって研究を進めています。私たちのチームは、人文科学研究所の共同研究の一つで、主に文学部の教育学専攻の教員を中心に「移民を背景とする青少年の自己形成」をテーマに研究を行っております。

日本におけるこれまでの移民研究は、出移民の歴史的研究や、今日のニューカマーの増加に伴う移民政策の研究や、それと関連した多文化共生の問題等が多くなされてきたかと思いますが、私たちの研究は、教育学的視点から移民、特に移民の青少年の人間形成、自己形成に関心を向けて研究を行っております。

このような研究関心の背景には、出入国管理法の改訂で、日系人に就業活動に制限のない

在留資格が認められるようになって三〇年が経過し、「デカセギ」という自意識とは裏腹に家族ともども定住する人々も増えていることが挙げられます。幼少期に家族に伴われて来日した、或いは日本で生まれた二世代の「在日ブラジル人」たちが、日本での生活をどう経験し成長していったのだろうかという教育的関心がもたれています。

本日は、その研究の一環として学外からこの分野で様々な興味深い研究、発言をされている先生をお呼びして公開シンポジウムという形で、研究を深めたいと考えております。この後、まず本学の鳥光美緒子先生の方から本シンポジウムの主旨説明を含め、本研究の中心的テーマであります「青年の自己形成」について、なぜ自己形成を問題にするのか、それと教育との関係、それを解明するために用いられる方法論としての「人間形成論的ビオグラフィ研究」について、ご自身の移民の青少年に対して行ったインタビュー調査を踏まえてお話をいただきたいと思っています。

続いて本日のゲストスピーカーのお二人の先生からの報告を聞きたいと思っております。本日の報告者ですが、後ほどご自身から詳しく自己紹介も兼ねてお話があるかと思いますが、まずお一人目として、研究者であると同時に、ご自身も「在日ブラジル人」と名乗られている移民当事者でもある武蔵大学のアンジェロ・イシ先生、それから移民二世代を扱ったドキュ

メント映画『孤独なツバメたちーデカセギの子どもに生まれて』の制作にも関わられ、彼らの支援者でもあり、デカセギ第二世代の市民形成をテーマに研究されている研究者でもある浜松学院大学の津村公博先生から報告をお聞きしたいと思います。

これからの進行のスケジュールですが、まず鳥光先生から本日の主旨説明を兼ねて本日のテーマ設定について発言いただいた後、イシ先生、津村先生の順でそれぞれ二〇分程度報告していただきます。その後、報告者相互で質問意見があれば出していただいて課題を共有し、次にフランスの移民の教育政策を専門に研究されている中央大学の池田賢市先生から指定討論という形で論点を出していただいて、少し休憩を挟んで議論を深めたいと思います。休憩後の議論では、参加されているみなさまからも意見をいただいで議論を深めていきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願い致します。

移民を背景とする青少年の自己形成ー趣旨説明に代えて

鳥光・鳥光です。今、森茂先生からご紹介いただきましたように、移民を背景とする青少年についてとり上げるにあたって、このシンポでは、彼ら彼女らの「教育」ではなく、「自己形成」

に焦点を当てて議論を進めていきたいと思っております。実は、私自身の専門分野は、このようなテーマとは関係ないのではないかと言われそうですが、教育哲学でして、「自己形成」という視点設定に至った理由も、私自身の、教育哲学的関心と深く関わっています。というわけで、最初に私からこの視点設定について、お手元のレジユメのサブタイトルにありますように「趣旨説明に代えて」お話しさせていただきます。なお、アンジェロ・イシ先生と津村先生にはおよそ一ヶ月ほど前、だったと思いますが、お配りしているレジユメとほぼ同じ内容のものをメールで送らせていただいております。

なぜ、自己形成なのか？ さて、この「自己形成」という概念ですが、Bildungというドイツ語の訳語です。このBildungという概念は明治期以来、教養とか、陶冶とか、人間形成など、さまざまに訳されてきました。教育哲学関係者を想定する時には普通、私自身は、「人間形成」という訳語を使います。ですが、人間形成というと一般には「人格形成」とほぼ同じ意味で受け止められることが多いようです。というわけで、ここでは「自己形成」という言い方を取りました。

そもそもBildungは何を意味するかについては、フンボルトの論から始まって、ヘルダーリン、ヘーゲルにおけるそれ、などなど、百家争鳴です。ゲーテに『ヴェルヘルム・マ

イスターの『徒弟時代』という小説がありますが、それはよく、「教養小説」と言われます。教養小説とは *Bildungsroman* の訳語です。ただこれを教養小説と呼んだのはゲーテ自身ではなく後世の人の命名なのですが。いずれにせよ、*Bildung* の古典的概念にはさまざまな「深遠な」コノテーションがつきまとう、ということなのです。そのさまざまな含意を、一旦括弧に入れて考えてみたい、と思います。そうしたらもう *Bildung* という概念に着目する意味がないと言われそうですが、ドイツ語の *Bildung* という語に特徴的なことは、そこに、教育という概念とは区別される自己形成という意味があることです。たとえば英語で *education* という語がありますが、ドイツ語にはそれにあたる語として、*Erziehung* と *Bildung* という二つの語というか、概念があります。日本語に置き換えると、教育と自己形成といえればいいでしょうか。そんなことは当たり前のことと思われるかもしれませんが、教育に関わる出来事について語ろうとすると意外にも、教育意識が先立つあまり、自己形成という視点が抜けてしまうということもまたよくあることだと思われれます。

自己形成と教育　教育と自己形成と、この二つの概念でどこが違うかと言いますと、その一番大きな点は、「教育する」の主語が教育者なのに対して、「自己形成する」の主語は、成長する者自身だということです。つまり教育というのは、二人以上の人間が関わる社会的行為で

す。それに対して、自己形成は自己が、他者やさまざまな出来事と関わることで、その関わった経験を自分なりに考えることで生じる変容を意味します。教育が何らかの効果をもたらすとするればそれは、自己形成が向かおうとする方向を踏まえて行われたときのみ、です。もちろん、自己形成がなされるということはそれ自体、教育を前提とします。教育的な関わりを受けて初めて人は、自己形成する存在になるのですから。ただそうは言っても、教育をどう経験し、どう考え、どう活かしていくかは、成長する当該者次第であるということをお忘れたいけないだろうと思います。要は、自己形成という視点をもって、教育について考えることが重要だということです。

方法としての人間形成的バイオグラフィー研究 さて、では、自己形成を解明するということは

どのようにすれば、できるのか。私自身は、人間形成論的バイオグラフィー研究 (die bildungstheoretisch orientierte Biographieforschung: 以下BoBと略記) と呼ばれる、ドイツの教育学に由来する方法を使っています。BoBは、インタビュー法を用いるという点では、北米由来のライフストーリー法に重なります。特徴的なのはインタビューのやり方です。インタビューの冒頭に、あなたのこれまでの人生のキャリアを語ってくださいと言った、漠然とした問いを投げかけます。この問いに対して、何をどのように、どの程度語るのかは語り

手次第です。インタビュー法の分類で言えば、非構造的インタビューということになりますが、何を語るのかについて、題材の選び方とか、組み立て方において、語り手に多くを委ねることにおいて、このインタビューの仕方は特徴的です。

今日一般に、ライフヒストリー法の用いられ方として、社会問題の解決を目的に、あらかじめ限定された問題解決のための資料の一つとしてインタビュー・データを位置づけられる傾向があると思うのですが、これに対してBOBは、人間形成（自己形成）という非常に曖昧で茫漠とした課題に、ナラティブ・データの解読を通して追ろうとすることにおいて、特徴的と言えるだろうと思います。

教育哲学的な関心から言うと、この方法を用いることで目指すのは、自己形成概念の解明という理論的な課題です。ではそれでは、この手法は、移民を背景とする青少年の支援に対してどのような関連性を持つのか。差し当たっては、支援や教育が、当事者である青少年にどう受け止められ、彼（女）の目指すところと支援や教育がどう関わっているかを明らかにすることができるかと言う、その限りにおいて、広い意味での評価研究として位置づけることができるのではないかと考えています。

移民を背景とする青少年のBOB研究の現状と課題

これまでに、移民を背景とする青少年に

対して私が行ったインタビューは一件だけです。在日ブラジル人のCさんに対するインタビューです。このCさんのインタビュー概要については以下をご参照ください。

・ Cさんは、ブラジル生まれ。父親が日系二世、一つ上に姉、四つ下の妹がいる。ブラジル時代については、苦勞のない時代、と回想。

・ 父親は、Cさんが六、七歳のころ「デカセギ」のため来日。当初は単身だったが、父親が事故で怪我をしたこと契機に、介護の必要から、母親と子どもたち三人が来日。Cさんは来日当時一〇才。

・ 小中学校時代の話題は、集団いじめ、学業上の問題など。

・ 自分なりに、将来を考えていくようになるきっかけとして述べられたのが、中学校時代の、フィリピン人の同級生や母語スタッフとの出会い、教師の支援、全外国語教育研究協議会への参加など。

・ その後、定時制高校をへて大学進学、英語の教員免許を取得。採用試験は四回続けて不合格、私立高校の教員になることを決める。インタビュー時点で、勤めて三年目。

解説はまだ手つかずですが、一つには彼がその時々で求めていたのは何なのか、そして、母語スタッフや教師らの支援はそれとどう関わっているかと言う視点から解説することを考えています。また、外的条件の近い事例と対比することも考えています。これはインタビュー事例ではなく、当該者が自分で執筆されてすでに書物になっている例ですが、右田(二〇一三)などが対比の事例として考えられます。それによって、それぞれの事例で、当該者が求めているものの違いを一層明確に捉えることができるのではないかと考えています。さらには、支援者サイドの方のインタビューも考えられるかもしれません。支援者(教師)にとって移民の背景をもつ青少年との経験はどのような意味を持っていたのか、それを明らかにすることも視野に入れて、ということだと思います。それによって自己形成と教育との関係を立体的に捉えることができるのではないかと考えています。

なおこのシンポジウムは、人文研の研究プロジェクト「移民を背景とする人間形成に関する日欧比較研究」の一環として行われるものです。このプロジェクトの今後の展望について言えば、今後例えば日独でのワークショップなどの開催も視野に入れていきます。ちなみに、ドイツ語圏における移民を背景とする青少年についてのBOBには、一定の蓄積があり、トルコ移民二世の青年のインタビューの逐語記録も公刊されています。

おわりに…趣旨説明にかえて

移民教育については専門外である一研究者の個人的印象なので、移民を背景とする青少年の研究においては、どのような教育と支援がなされているか、またなされるべきかという問題関心が前面に出される傾向があるように思われます。もちろん、教育と支援が重要な課題であることは間違いありません。ですが、すでに述べてきましたように、教育と自己形成とを概念的に区別して捉えることで、教育に関わる事象をより複合的に、よりリアルに把握することができないかと思えます。

また、「当事者の視点、支援者の視点、研究者の視点」というサブタイトルについてですが、私自身がこれまで接した移民教育に関する研究の多くは、支援者の視点からの研究でした。研究対象に関与的であることは、研究遂行の上で重要なことだと思えます。ですが、支援者という立場は時に、当該者に対して、支援と教育を必要とする存在として捉えることへと視野を限定させることになりかねないように思います。これがこのサブタイトルを設定した直接のきっかけです。

当事者であれ、支援者であれ、研究者であれ、人の自己理解や他者理解に絶対はありえません。だからこそ、対話を通して、それぞれの限定された立場や視点を豊かにすることが求められるのだと思います。相互の対話はさらに、それぞれの自己内での対話へと引き継がれ、

それによって私たちは、自らの自己理解や他者理解を反省し修正し豊かにすることができま
す。今回のシンポジウムもまた、何程か、そのような機会の一つなることを期待しています。
以上です。ありがとうございました。

司会(森茂)・・当事者視点、それから、支援者視点、研究者視点ということですが。今日のお二人
の先生はこの分野の研究者ではあるわけですが、一方でアンジェロ先生は当事者でもあるし、
また、津村先生はそういう子どもたちへの支援者でもあったりもしています。そういう今、
立場の異なるいろんな視点から、今日、立体的に討論ができればというふうに思います。そ
れではアンジェロ・イシ先生、よろしくお願いをいたします。

報告一 在日ブラジル人二世 研究者から見る青少年の人間形成

はじめに・・自己紹介 アンジェロ・イシ・・皆さん、こんにちは。アンジェロ・イシと申します。
イシがファミリネームで、アンジェロがファーストネームです。どうぞブラジルのように、
僕も大学ゼミ生たちにはファーストネームの呼び捨てで、アンジェロと呼ばせているので、

そのように皆さんも呼んでいただけだと思います。よろしくお願いします。それで今日の話は基本的には文字のレジュメをベースに進めていきますけど、その前に自己紹介の部分だけ、ちょっとだけ写真も見せようと思います。特にメディアが僕のことを紹介するときには客観的な事実としては確かに日系ブラジル人三世のアンジェロ・イシさんというのは正しいですが、アイデンティティというか自己定義と言うべきか、戦略的な情報発信としては、自分は今かなり早い段階から自己紹介で自分は在日ブラジル人一世だと発信し続けているわけです。で、プラス、東京にもずっと住んでいるので東京人でもあるという、そういうローカルなアイデンティティの部分もアピールしてきているわけです。で、ちょっと前に朝日新聞のフロントランナーで大きく紹介していただいたのですが、おそらく、朝日新聞がこういうふうに僕に注目したのは自分の事を在日ブラジル人一世というふうに発信しているということが珍しいというのが目に留まったのではないかと想像しています。ただし、僕はフロントでもなんでもなく、いまだに孤独なランナーだというふうに自分のことをある意味自虐的に認識しているわけです。というのも、僕の妻も同じ日系ブラジル人三世ですけど、彼女でさえ、いまだに自分のことを在日ブラジル人一世というふうには発信はしておらず、この言葉はまだまだ流行語になるには程遠い状況であって、ほとんどフロントというよりは孤独な

ランナーです。で、この写真をお見せしたかった理由は、実はわざわざフォトグラフィアにこだわりがあって、僕としてはよく行っている有名な群馬県の大泉町で写真を写してもらえばいいと、日帰りで済む場所を提案していたけれど、僕がいつもフィールドワークに行っているわけではない場所です。彼がどうしても愛知県の豊田市の保見団地で撮りたいと。有名な集住地であるこの保見団地でこの写真を写したいというこだわりがあったわけです。それで久々にそこを訪れて、今日のテーマのキーワードの一つであるこの青少年たちと、二つの意味で触れる機会になったわけですね。一つは、ちょうどこの写真、日が暮れるのを待って写したわけですけど、その直前まではブラジル人の子どもたちがワイワイとそこでストリートサッカーならぬ団地のお庭サッカーを楽しんでいたわけです。なんかある種、健全な形で肅々とこの日本という地において成長しつつある頼もしい少年たちだなというのが、この保見団地での一つの在日ブラジル人青少年のリアリティというか、一つの顔なわけです。ただし、もう一つの顔を見てしまったんですけど、それは、このすぐ近くにあるショッピングセンター的な総合施設、その中にいろんなブラジル人向けのショップとかサーブが入っている建物ですが、その建物のトイレに行ったところ、案の定そのトイレのドアとか壁にはいろんな落書きがあって、そこはかなり強烈でショッキングな……このあと静岡県浜松市につい

て津村先生から報告されるであろうリアリティにも通じる話でもあると思いますが、もう一つの顔が垣間見られました。やっぱりこの孤独感や孤立感、日本社会に対する不満とやるせなさのような気持ちが続まったいろんな書き込みとか落書がトイレの中にあつて、どっちのリアリティが日本におけるブラジル人のその青少年たちの素顔なのかと言ったら、当然それは両方だということになるかと思うのですね。

この日本におけるブラジル人の研究を進めてくると同時にいわゆる日本の各省庁から時折、声がかかって入ったのですが、僕がその当事者視点で代弁することを、場合によっては議事録にさえ残してくれないパターンが多かったのも事実です。僕が何を代弁したいのかというよりも、むしろ、当事者を代弁する人間をメンバーに入れていざということ自体に彼らの主目的があるのではないかと思う事が非常に多いわけですけど、何はともあれ、多文化共生政策ですとか鉤括弧付きの移民政策に関わるような委員会にも参加させていただいてます。

在日二世の父親になった私　で、ここからレジュメの方をベースに若干早口で時間内に収めるために話を進めていきたいわけですが。今このWordのファイルが見えているでしょうか。司会(森茂)・・・はい。見えています。

アンジェロ・イシ…ありがとうございます。まずは自分にとって最も身近な移民二世から話を始めたいと思います。それは、結婚一六年目にしてようやく九年前に生まれてくれた僕の娘、つまり僕から見ると在日ブラジル人二世なわけですね。二世の親になって僕は九年前にまず在日ブラジル人一世としての自覚をより強くしたわけですが、彼女は東京の病院で生まれられたわけです。つまり客観的事実としても、文句なしの東京人として娘は生まれたわけですが、皆さんご存じのように、日本国籍をもらうことができていない。これに対する違和感、もちろん親としても僕はずっと持ち続けています。うれしい事に、このあいだ、彼女と対話していると、こういうやり取りになったわけですね。僕は「あなたが持つてるのはブラジルのパスポートだけで、日本のパスポートをもらうのだったらブラジルのを捨てないとダメなんだよ」と。そうすると娘は「いや、私はブラジルのパスポートは絶対に捨てない。それなら帰化する必要はない」と。もちろん彼女は帰化という言葉ではなく、何か違う言葉を使っていたのですが、そういうニュアンスの言葉を返してきました。自分は日本で生まれたのだから、日本のパスポートをもらっていいと思うし、そしてお父さんとお母さんがブラジル人なのだからブラジルのパスポートをそのまんま持つていいと思うと。で、私が生まれた国のパスポート、そして、私のお父さんとお母さんの国のパスポートを持つのは当たり前だとい

うようなことを彼女は言ってくれたわけですね。僕は、今の日本の法律ではそれは無理だと反論したところ、彼女は、だったら法律を変えればいいんじゃないかというふうに返してきました。どういうふうには教育への投資という意味では、どうすれば弁護士にまで導くことができののかなというふうにも思ったり、あるいは一方で、立法をする側の政治家を彼女が目指すなら、そこには大きな壁があつて、彼女は帰化して日本国籍を取得しないと、つまり先にブラジルのパスポートを捨てないと、ブラジルのパスポートを捨てなくてもいいための法改正を提案する側の政治家にはなれない、選挙で選ばれることができないというパラドックスもあるなあと思えたりしました。娘はまだ国籍という抽象的な概念について認知できているわけではないのですが、これまで何度も一緒にブラジルに一時帰国したことで、ブラジルのパスポートに対してすでに愛着を持っているわけです。で、娘の場合、彼女の人間形成とか自己形成を決定づけた要因のひとつはおそらく親とともに頻繁に一時帰国を繰り返していることによる彼女のパスポートの使用頻度ではないかというふうに思ったりするわけです。

私の研究と青少年の接点　次に、僕のこれまでの研究と、青少年との接点についてですが、実はどちらかといえば青少年よりは、むしろ親世代にずっと接してきているわけです。エス

ニック・メディアと呼びますが、コミュニティのメディアであったり、広い意味での文化活動であったり、コミュニティづくりであったり、あるいは鉤括弧付きのアイデンティティや帰属意識などに着目してきたわけです。最初はブラジルにいた頃に、日系人コミュニティの研究から始め、日本に来てからはいわゆる在日ブラジル人、さらに近年は、もっとフィールドを広げて、各国に移住しているブラジル発のいわゆる僕が言うところの「在外ブラジル人ディアスポラ」を国際比較して、その中に日本にやってきたブラジル人たちを位置づけるという研究です。つまり日系というファクターはいったんリセットして、ブラジル発の在外ブラジル人として日本に来ているブラジル人を見つめ直すと何が見えてくるんだろうかというような視点で調べようとしているわけです。その一方で、やっぱりいろいろな自分が関心を持っているというよりはむしろ周りからそういうプレッシャーとか期待みたいなものがかかっているのに応える形で移民政策論や多文化共生施策の検証なりをしています。他方、それにはわかりずっと関わっているとある種のなんか息苦しさとか、物足りなさが本音レベルであるがために、いわゆる脱移民研究じゃないですけど、たとえば最近、手掛けていることは移民そのものを主題にするのではなくて、各国における日本政府が文化外交の施設として手掛けている「ジャパン・ハウス」、その「ジャパン・ハウス」のブラジル版と英国版と

アメリカ版がそれぞれどういうふうに違ったり似ているのかというようなテーマも追っているところ。で、僕自身は青少年に特化した研究はしてこなかったわけです。したがって二〇代の在日ブラジル人を最も多くインタビューしたのは最近ではなく、かなり前のタイミングになるわけです。つまり、僕自身が二〇代で日本の大学に留学したわけですから、その九〇年代に、いわば彼女らもまた、その頃は青少年だった頃です。二〇代前半の人も大勢いたわけですけど、そういうデカセギのパイオニアたち、今で言えば第一世代の聞き取りが多いわけです。その一方で、この青少年にまつわる忘れがたい事件とえば、これを風化させたくないので、今日はこういうテーマなのであえてリマインドさせていたいただきたいのですが、愛知県小牧市で、いわゆる日系ブラジル人少年リンチ殺人事件で命を落としたエルクラノ事件が一九九八年に起きました。エルクラノ君は被害者なのに、報道によっては彼が不登校で路上にたむろしていた非行少年的な要素が強調されて、僕は違和感が強かったです。報道では彼が不登校だったと強調されたのですが、実は彼はブラジル系の通信教育を受けていたのであり、学校には行ってなかったけど、勉強は家でしていたというところは、ほとんど触れられていないわけです。あるいは同じく九〇年代には、バイリンガルのヒップホップ音楽で短期間だけど一世を風靡したTensais MCsについても論文として発表しました。あの

Tensais MCsについてもまた、偏った表象がなされており、本当は日本人とブラジル人のメンバーが同じ舞台で共演する多文化共生的な発信だったわけですよ、この彼らの活動というのは。そういう協働の可能性を体現していたはずなのに、ブラジル人青少年が音楽を通して非行から救われた物語として消費されてしまったわけですね。彼らはリーダーが一生懸命違いう発信をしていたのに、実際にたとえば日本のテレビが注目して密着取材して紹介するのは、もうひとりのいわゆる犯罪歴を持っていたメンバー、その彼に光を当ててそういう物語として、このTensaisのことが紹介されるということにやっぱり違和感がありました。

その一方で、中学生で、自分のアイデンティティ探しを題材に映像作品、いわゆるセルフドキュメンタリーを制作したルマ・ユリ・アキズキ・マツバラ、通称、松原ルマというふうで紹介されているわけですけど、その彼女にも注目しました。彼女は中学生の時に『レモン』という短編を撮って、これは日本とブラジルとで揺らぐアイデンティティ探しを描いていたわけです。で、高校生になってから彼女は『ヒョジョンへ』という作品を発表したんですね。これは全編、日本語でもポルトガル語でもなく、韓国語、彼女が一生懸命覚えたたどたどしい韓国語でナレーションしているということを含め、非常にオンリーワンの独創的な作品なんですね。学校の国際交流で、ホームステイに韓国に行ってそこで出会った韓国人の

生徒、ホームステイをさせてもらったその生徒がヒョジョンさんだったのですが、その彼女に日本に戻ってからビデオレターを送って、実は自分がずっと日本人のフリをしていたけれど、本当は自分は日系ブラジル人三世であることを告白するという脚本で、この多文化的なバックグラウンドを持つ青少年が秘める可能性を実感させる力強い作品でした。

本日のシンポの趣旨に賛同！

で、今日のこのシンポの趣旨との関連ですけど、在日ブラジル人の青少年の話をするというよりは青少年たちを含めた移民をどう研究すべきか、とりわけこの当事者性という難題についても自分の悩みやジレンマを少し皆さんと共有したいです。今日のシンポと、そして鳥光先生が示された研究方法に大いに賛同できています。これまで多くの移民研究が、そして日本のマスメディアによる移民の表象の多くが、この問題の所在や課題設定において、研究対象者、鉤括弧付きの移民とか当事者の関心とかりアリティ、ニーズや声を無視、もしくは軽視しているという点がずっと気になっているから、ですね。

最近、本日、司会を務めていただいている森茂先生にもお世話になって、「日本移民学会」の三〇周年記念シンポにおいて、僕も登壇者の一人して次のような問題提供したばかりですね。移民の声、あるいは移民研究者の研究成果が政府、政策立案者に届いていない、響いていないのではないかと。移民研究、あるいは研究者は、在日外国人の良き理解者、ある

いは代弁者になれているのだろうか。日系四世ビザの設計においても、二〇一九年の入管法改定においても、来日する外国人の家族の帯同は禁止というのが貫かれたことは、この三〇年間、移民の声が国に存分に届いていないことを象徴している。また、周知のとおり、コロナ危機において法務省は定住、永住資格を要する在留外国人に対しても再入国の権利を制限するなど、移民に対して冷酷な対策をとった。このような定住外国人を冷遇したのは先進諸国の中で日本だけなんですね。移民の声を届けるべく研究者による多方面への積極的な発信が問われているのではなからうか。入管施設で移民、スリランカ出身の難民認定申請者が、最低限の医療処置が受けられずに死亡するとき、コロナ不況で仕事を失って多くの移民が苦境に立たされているとき、それでも私たちは自分が興味ある研究だけをやり続けていいのだろうか。もし答えがイエスだとすれば、それを担保する根拠をしっかりと自覚しておく必要があるろう、というようなことをそのシンポで述べました。

ところで、移民のアイデンティティをめぐる議論でもこれまであまりにも日本人バーサスブラジル人という二項対立的な考えに基づいた問いの立て方や、インタビューの質問項目が目立ってきたように僕には見えます。狭義の「エスニック」アイデンティティにはかりスポットが当てられたがために、たとえば階級意識や職業アイデンティティが軽視されてきた

と思います。僕が九〇年代に移民への聞き取り、多くの場合は、雑談で、この非構造化インタビューに近いものですが、それを重ねていくうちに、たとえばブラジルで自分のことを日本人だと思っていたのに、日本に来てブラジル人だと分かったとか、日本で外人扱いされてアイデンティティが揺らいだなどのアイデンティティの悩みや揺らぎは移民自身の悩みの深刻度、優先順位では、どちらかといえば低いことに気づいたわけです。つまり、日本の研究者たちは、一生懸命この部分を強調しようとしてある種、誘導尋問をいっぱい浴びせてきたわけですね、ブラジル人たちに調査をするときにですね。でも、鳥光先生がおっしゃったように、こちらからあらかじめ何かを押し付けるのではなく、自然な流れの中で向こうがいちばん何を持ち出してくるのか、何を気にしているのかというのに注目してみると、こちら（階級や職業と関連する悩み）のほうが目立っていたわけですね。つまり、彼らの多くが悩んでいたのは、向こうでそれなりのキャリアや職業に就いていた、向こうで一定の学歴を有していたのに、日本に来てデカセギとして工場労働を始めると学歴も職歴も無意味となって、考慮されず、一律、非熟練かつ非正規労働者となってしまったことです。

疑問視される私の「当事者性」　その一方で、僕が「当事者」であることが今日、お声がけいただいたひとつのきっかけだと思いますが、僕の「当事者性」そのものが実は多くの場合、

疑問視されているというジレンマも持っているわけですね。僕は自分の当事者バーサス研究者のジレンマを常に自覚、自問自答し続けているし、当事者としてのアドバンテージを過信せず、しかし、過小評価もしないように努めてきたつもりです。しかし僕には、ブラジル人を調査する中でたびたび浴びせられてきたある意味では屈辱的、僕から見るとなかば暴力的な言葉があるわけですね。それは、人によって言い回しは若干異なるのですが、おおむね次のような言葉なんです。ね。「あなた、アンジェロは留学生なんだから所詮、工場で働いたこととなければ、デカセギとして日本にやってきたわけでもないの、工場で働いている私たちの本当の気持ちや辛さは理解できていないんだよ」というような言葉を言われるわけですね。つまり、一方では日本人の研究者仲間からは、僕が共同研究のチームに加わると、「いやー、すごくこれで助かります」と、「うれしいです」と、アンジェロはデカセギ者たちと同じブラジル人だから彼らの気持ちや事情が理解しやすいし、などなどと言われるわけですが。でも、多くのデカセギ者たちからすれば、エリート留学生よりも同じ雇用形態や似た境遇におかれている日本人の非正規労働者のほうが、自分たちの事を理解できているのかも知れないというような発言を聞かされたりもするわけですね。これはやっぱり難題というか、トリッキーな問題なのであって、というのも突き詰めれば本人以外のすべての人は、誰ひと

りとして、その人のことが理解できないという極論になりかねないんですね。あるいは、青少年でなくなった私たち成人の研究者も誰ひとりとして、青少年たちについて論じる資格がないという暴論にもなりかねないわけですね。だから僕はそこで怯むことなく調査を続けてきたわけです、そして僕なりのこの問いに対する答えは、常に自分が論文で発表した考察とほぼ同様の内容をブラジル人たちがよく読んでいるエスニック・メディア、こういうブラジル系のフリーペーパーでコラムとして執筆することなんです。で、そこで読者に検証してもらおうわけですね。つまり、僕の仮説やデータや結論がどの程度その当事者というか、日ブラジル人たちに理解され納得してもらえるかを点検していただいているようなものですね。実は移民研究者によるこの社会還元は移民と移民コミュニティに役立つばかりではなく、研究の質を担保するというか、その正当性の検証にもなりうる。で、研究者の利益にもなりうると思います。で、たとえば『ヒョジョンへ』と『レモン』とルマ松原は当事者のことを代弁しているというふうに評価されています。僕自身もほかの人も、何人かそういうふうに評価しています。しかし、実は見方によってはこのルマさんの代弁性にも僕と同じように限界があるのであって、たとえば彼女の親の経済力と文化資本と社会関係資本、レジュメには書いてないのですが、彼女のお父さんはJリーグのサッカーチームの通訳。つまり、い

い給料をもらっている人ですし、彼女のお母さんは神戸で超有名なNPOの代表、つまり、コミュニティリーダーのまさに代表格なわけですね。だからこのルマさんがデカセギで来日した人々と比べればまったく異なって、本日のもう一人の登壇者である津村先生が支援してきた青少年たちにとってはこのルマさんの作品はあまり救いにはなりえないかも、つまり、自分たちと同じ境遇だと歓迎される保証はまったくなかったりもするわけですね。で、ルマさんの『レモン』や『ヒョジョンへ』、あるいは津村先生の『孤独なツバメたち』、どちらがいったいこの青少年の実態をより忠実に表しているのか。答えは両方ともそれぞれ異なる側面に光を当てているというのが正当な答えだと考えます。まさに最初にお見せした写真、保見団地で僕が出会った二つの側面じゃないですけど、この青少年たちのこの「光と影」というふうに、大げさに表現することも可能です。

もうひとつ、工夫と言いますか僕の僕なりのやり方としては、潮流に反するんですけど、できるだけ実名にこだわって実名で公表できる人々の事例研究を手掛けてきています。そうすれば複数の一般人が僕の仮説、データ、結論を検証できるわけですから。つまり、僕がその人について書いた分析が正当かどうかを簡単にほかの人たちが検証できます。多くの移民研究者は調査対象者を匿名化することが個人のプライバシー保護だと口にしてきましたけど、

あえて挑発的な発言をお許しただけならば、調査対象者や調査地をAさんとか、B、Cにすることによって、もつとも守られているのは、危うい仮説や、不正確、ときには不誠実な記述、そして安易な結論を出している研究者たちなのかもしれないと思ったりさえします。在日ブラジル人の青少年の自己形成を左右するいくつかの要素

で、在日ブラジル人の青少年の自己形成を左右するいくつかの要素ですけど、おそらく本日の主催者や参加者もつとも関心を示すのは移民の子である青少年、在日ブラジル人の一世や、あるいは一・五世たちの人間形成、自己形成において、いかなる要因が重要であり考慮するべきかということでしょう。これについて、僕は明確な答えを示すことはできないが、現代移民特有の要素、日本とブラジルの間をまたぐ人々ならではの要素は確かにあります。ひとつは時間ですね。まず、子どもが誰とどこで毎日を過ごすのかという点に着目すれば、とりわけ九〇年代のデカセギ先発者の子弟の場合、親と過ごす時間の総数が圧倒的に短かった。そういう青少年が多かったことは全般的な特徴として挙げられるでしょう。で、両親が、共に工場で残業を含めた長時間労働をこなし、学齢期の子どもが場合によっては一人で家で過ごすというパターンは珍しくなかったです。で、僕が参加した共同調査でも「鍵っ子」というキーワードが飛び交っていました。

もう一つのキーワードは空間ですね。多くの在日ブラジル人子弟がストリートで多くの時間を過ごし、そこに居場所を見出しているのも確かでしょう。次に、言葉、日本語で満足にコミュニケーションが取れない両親を持つ子どもが多いことは特徴として挙げられるでしょう。子どもが親の通訳を務めるといふ話は有名ですね。ところでどの言語で聞き取りをするかによって（私たちがこの青少年たちと日本語で話すのか、ポルトガル語で話を聞くのかによって）発言内容が変わってくる可能性がある点にも注意した方がいいと思います。それから名前、どのような名前で自分のことを認知しているのか、そして、どのように呼ばれているのか、名前の扱いは非常に重要だと考えます。どのような経緯や戦略で在日ブラジル人の青少年が自分のことを名乗っているのかというのは重要だと思います。ここで再び僕の話話を少ししますと、彼女はアルファベット表記、日本ではカタカナ表記の名前を私たちは付けたわけですけど。小学校に入学した時、彼女の机にあらかじめ先生によって名前が書かれたのですが、ひらがなで表記されていたことに、まず彼女はすごい違和感を感じたし、僕らも感じました。で、僕が敬愛する日系ブラジル人研究者のリリアン・テルミ・ハタノさんがいるのですが、彼女はTEDx Kobeで次の言葉を述べたので引用したいですね。「子どもたちは、知らないうちに学校で慣れ親しんだその短い名前でしか自分の名前を書けないようにな

ります。親や家族に付けられた名前を使わないようになってしまいました。学校の名前を知りたいの、それとも本当の名前を知りたいの」というふうに子どもたちが言っているのを彼女は問題視しているわけですね。で、ハタノは『マイノリティの名前はどのように扱われているのか―日本の公立学校におけるニューカマーの場合』という本を書いてもいますし、在日ブラジル人の青少年や教育問題についてももつともよき理解者だったのですね。しかし、彼女は研究活動を中断しているの、本当にこれは残念極まりないです。

その他の要素　その他の要素ですが、宗教信仰も注目した方がいいのではないかと。多くの在日ブラジル人家族では宗教信仰は決定的な要素です。僕も『ひとびとの精神史』という本の中で一人の浜松市の有名な実業家の事例研究を書いたのですが、彼にとってもこの宗教信仰がキー要素だなあとという結論に達しました。

それと親に経済的な余裕がないことを強く意識しながら育った青少年は多いのではないのでしょうか。私がこれまで出会ってきた青少年たちに共通している意識のひとつは親が工場労働で大変な思いを重ねてきたと。親に追加の経済的負担はかけたくない。それが理由で大学進学は目指さないと。というケースは意外にも多いんですね、残念ながら。つまり、親が無責任とかで子どもに進学させてないのではなくて、子どものほうがそれこそある意味主体的に、

そして自覚的、意識的に進学を目指さないというケースが多いわけですよ。それによって、結果、工場労働者の再生産が世代を超えて継承されているのは、本当に危惧しています。

で、もうひとつ、人によっては注目ポイントかもしれないのが祖父母の不在ですね。祖母に接した青少年は相対的に少ないと思います。他にも自分のスペース確保の問題もあります。これはもう住宅事情の問題ですけど、この個室部屋が持てる自由環境で育った青少年も相対的に少ないと思われれます。とにかく教育に投資するという社会上昇の方程式を信じない親の子どもとして生まれ育っている人が結構多いですね。ただしこれは最近、少しは変化しています、特にブラジル政府によるいろいろな進学への動機づけ、施策も展開されていますし。

最後に政策提言を三つ　最後に政策提言を三つですけど、ひとつは、集住都市においてポルトガル語も教えるバイリンガルの公立学校を設立すべきだと僕は考えます。これは理想論だと分かっていますけど。この選択肢があれば、多くの在日ブラジル人青少年は救われているはずですよ。で、もうひとつは、日系四世の制度の見直しと大幅な緩和です。というのも、こういう制度とか法的な制約というのは、青少年たちの人間形成に外的要因として影響してきますからね。つまり、いちばんの問題はなんと言っても日本の多くの出入国管理の制度が家族

の帯同を許さないというのを原則としているわけですね。これは非人道的であり、それこそ移民を背景とする青少年の自己形成に悪影響を及ぼしているわけです。つまり日系四世が日本に來たければ家族は連れてこれないわけですね。要するに単身でしかこれないという制度設計になっています。で、最後に国籍法の改正ですね。せめて、定住者、永住者の子として日本で生まれた者には、自動的に日本国籍を付与する部分的生地主義の導入が求められます。そして、多くの論者が指摘してきたように、重国籍を認めるべきだと考えます。僕の娘の聲に答えるためにも、ということですね。あと、いくつか僕が今日のテーマと関連している書き物をピックアップしてリストという形で載せました。以上です。ありがとうございます。ました。

司会(森茂)・・はい、イシ先生ありがとうございます。今日のイシ先生の発表について、もう少し説明してほしいということや、簡単な質問があったらどなたでも挙手をされるか何か、言葉を出していただいて発言していただければと思います。よろしいでしょうか。

あとチャットにも書きましたがそれぞれの報告者へのコメント等がありましたらどうぞ自由チャットの方に書いてくださって、あとの討論の方でまた深めたいというふうにおいま

す。特によろしいでしょうか。聞いてみたい事があれば、どうぞ自由にご発言ください。

えっと、それでは、もし無いようでしたら、あとの討論のところでもまたいろいろ深めたいと思います。イシ先生、非常に刺激的である意味挑発的な最後の提案もしてくださって、いろいろまた、たぶんオーデイエンスの方も何か意見があるんじゃないかと思しますので、あとでまた、いろいろ話したいというふうに思います。

それでは次に津村先生のほうからご報告をお願いいたします。

報告二 デカセギ第二世代の青少年たちと『孤独なツバメたち』のその後

津村…承知しました。画面共有させていただきます。そうですね、大丈夫でしょうか。

司会(森茂)…はい、見えています、大丈夫です。

津村…はい、ありがとうございます。聞こえますか、大丈夫ですか。

司会(森茂)…はい、聞こえています。

はじめに 津村…『孤独なツバメたち』の青年たち、つまりデカセギ第二世代の青年たちの話を
をする機会をいただいたのは、ずいぶんと久しぶりです。『孤独なツバメたち』に登場した

青年たちのその後についても伝えられるかと思えます。私がこのドキュメンタリーを撮り始めたのが二〇〇一年からです。

CSN (College Students Network for Community Service) を浜松市内の大学生と設立し、浜松市の地域課題の一つである海外につながる子どもの教育問題に取り組みました。海外につながる子どもが集住する地域に、学習支援及び居場所づくりの場を構築して、大学生メンターが子どもたちの悩みを聞いたり、宿題のお手伝いをしたり、一緒に映画に行くといったプログラム、メンターシップを開始しました。メンターシップ・プログラムでは、月に一回、大学生メンターが、担当するメンティ(子ども)についての現状や課題を共有するケースカンファレンスを実施していました。大学生メンターが担当する子どもやその保護者との信頼関係が構築されるにつれて、学校に行かずに、保護者が派遣されている製造業の工場に同行しているケースが、ケースカンファレンスにおいて報告されることが度々ありました。つまり、子どもが義務教育年齢期でありながら働いているという状況です。CSNに所属している大学生メンター全員に対して詳細なヒアリング調査を実施しました。さらに保護者にも聞き取り調査を実施しました。その結果、少なくとも三人の子どもの働いている状況、その理由や経緯が判明しました。三人とも夫婦共働きであり、日本の公立学校に適応できず

に不登校に陥ると、就業中に家に子ども一人で残すことができずに、派遣先の工場に連れて行き、終業まで工場内で待たせたことがきっかけでした。やがて、工場内の清掃等の軽作業に従事することからスタートして、他の仕事も覚えて、働くことが常態化していきました。メンターシップに参加する子どもの中に、最初から製造業に子どもを送り出すメカニズムは存在せず、学校での不登校が引き金となり、保護者も容認した形で、工場に紛れ込んでいたということになります。しかし、海外の子どもが働いている市内の事例が他にもある可能性もあると考えて、実際に子どもが働いている事例を示しながら、市教育委員会がその実態をどこまで把握しているのかヒヤリングを実施しました。さらに、市長や浜松市に対して、子どもの違法な就労の実態調査の実施を要望しました。一ヶ月後、海外の子どもたちが働いている事例はなく、そのため、調査をする必要もないと文書で回答がありました。同時に、子どもが違法に働いていることを黙認していた悪質な派遣会社の存在も把握し、メディアと連動して、警察に通告しました。また二〇〇六年から、独自に「日系南米人の青少年の生活と意識について」の調査を始めました。

日系南米人の青少年の調査

週末の深夜から未明にかけて、浜松駅周辺に集まる一六歳から二九歳の青年たちを対象に、義務教育年齢期に働いた経験の有無や仕事内容について、路上

での対面調査をスタートさせました。二〇〇八年のリーマンショック以前には、浜松駅周辺には、ストリート・ダンス、スケーボー、走り屋ドリフト、暴走族、ギャングなどの多様なグループに所属する青年であふれていました。調査の実施当初は、就労に関する経験に関する質問項目でしたが、就労に至る理由として、質問項目は、家族、学校、地域社会、集団性や集団行動、アイデンティの分野まで計三五項目になりました。二〇〇六年から二〇一二年まで、五〇〇人を超える青年たちに調査をしました。

『孤独なツバメたち』は、その調査対象の中にいた青年たち五人を対象とした映像エスノグラフィです。私は彼らと話しているうちに、彼らの持っている魅力、日本人の青年とは違う魅力に気づき始めました。どういう魅力かという点、先ほどアンジェロ先生もおっしゃっていました。日本人の青年が失いつつある、つながりを求める姿勢です。路上で集まる青年は家族から孤立しているんですが、その青年たちが疑似家族のような、小さな社会集団を作り出しているところに非常に魅力を感じました。さらに、彼らの、自らのことや気持ち、欲求を素直にストリートに表現する語りや、彼らが仲間集団と共有する価値観、人生観や家庭観、そういうところに魅力を感じるようになっていきました。

路上調査で出会った何人かに集まってもらいフォーカス・グループ・インタビューも同時

並行で実施しました。そのような経緯の中で『孤独なツバメたち』が生まれてきたということになります。

路上での対面式の調査やフォーカス・グループ・インタビューは非常に楽しいものでした。彼らと話しながら、彼らが行くクラブにも行くようになったんですが、最初は、バウンサーというですね、ごっつい人たちがいたんですが、毎回行くうちに無料で入れてくれるようになり、当初は撮影すると言われてたんですが、勝手に撮影して、追い出されたりとか、いろいろありました。警察が毎回巡回して、職務質問や所持品検査を任意で求めるわけですが、青年たちは、私が警察側に立つのか彼らの側に立つのか見極めようとしています。そういう際には、警察に対して、毅然とした態度で接するうちに少しづつ信頼を置いてくれたのだと思います。今でも彼らと会うと、「あの時って、最初の方は、絶対覆面だと思ってたよ」と言われます。この調査を続けていく中で、徐々に彼らの中でも認知されていくようになり、二〇〇六年頃から、いろんな相談を受ける様になりました。彼らのドキュメンタリーをエスノグラフィックという形に深め、そこからさらに映像でも撮るところから、『孤独なツバメたち』は始まりました。

次に、「学校間移動（二国間と国内）」という調査項目についてですが、時間の関係があり

ますので、ちょっと割愛させていただいて、ほんの一部だけお話ししますと、学校間移動というのが非常に頻繁にあります。デカセギの子どもたちは国内でも、市外、県外への移動、さらにブラジルを中心とする南米諸国等の送り出し国と受け入れ国の二国間の移動を頻繁に繰り返します。それは当然、親と行動を共にすることで、子どもの学力の定着を阻むことになりません。これは親の問題が大きいです。親が、移民というより「デカセギ」という意識であることと関連するんですが、親が最後に切るカードに、帰国というカードがあります。移民という覚悟がないまま「デカセギ」に来ているので、帰ればすべて解決するというふうに親は思っています。

結果、親が帯同してきた子どもたちも一緒に帰ることになる。子どもたちは、最初、日本に来たときは、「まあ、仕方ないや」と自分を納得させますが、日本の公立学校に少し慣れてきたところで、今度は、例えば、「群馬県に行くよ」、「埼玉県に引っ越しするよ」というふうに、移動させられる。親は、一円でも賃金の高いところに移ります。「デカセギですから、お金目的で来ているので仕方ない」とまた、移動を受けいれます。しかし中には、「先生、もう二回目に、転校って言われた時には、親にキレた」、ブラジルから渡航して、短い期間に二回の転校は、「考えられない」、「親たちは、あなたたちのためよって言いながら、

実際には子どもの教育を犠牲にしている」と私に訴える青年もいました。こういう中で、アンジェロ先生もおっしゃってましたけれども、子どもたちが、親たちのデカセギの犠牲になっていきます。彼らの最終学歴もここに記載してある通り、中学校中退から中学校卒業が多く、帰国して再入国も多いですから、学歴も二国に渡る場合も多いです。また、地域における差別についてもいうと、職質が本場に多いですね。ブラジル人と見ると走ってきて職質するっていうような状況です。さらに、もうひとつ挙げられるのは、信念や行動基準に重要な役割を果たす重要な第三者 significant others が日本人にもブラジル人にもいない。ブラジル人にも、重要な第三者がいらない理由は、彼らは、二重の意味で孤立しているからです。一つは、親世代の第一世代からの孤立ですね。それから、もう一つは日本人社会からの孤立です。彼らは、たとえば豊橋でドリフトをやるグループだとか、それからストリートでブレイクダンスだとか、ヒップホップだとかをやるグループだとか、夜の街の浜松において、あるいは豊橋、名古屋において、先ほども申し上げましたが、疑似家族と言えるようなグループを築いていたんですね。そういう狭い社会集団を形成していく中で、親に対する不信感を抱くようになり、「(親は)カネ、カネ、カネ。カネカネ人間になっちゃったよ」と言い放つ。狭い社会集団から抜け出すことが出来ずに、それに由来する狭い考え方のために、彼らはい

ろんな問題を抱えても、彼らだけでは、解決できないのです。これまで信頼できる日本人に
出会って来なかつたんですね。教師に対する、あるいは教員に対する不信感があつたのだと
思います。彼らは、その狭い社会集団性、狭い社会集団の中で、その中の所属意識を持つ
ことができず、狭い社会集団のゆえに解決できない問題を常に抱えながら、そこから離
れられないジレンマを抱えていたと思います。

フォーカス・グループ・インタビュー 路上調査で出会った青年たちを呼び出して、フォーカ
ス・グループ・インタビューをするようになりました。こういったフォーカス・グループ・
インタビューをする中で分かつてきたのは、彼ら、第二世代の、「諦念と覚悟」、ですね。松
尾さんの科研で、これには森茂先生もご一緒させていただきましたが、その科研で明らかに
したのが、「諦念と覚悟」です。彼らが発する言葉には、常に諦めがまとわりついていま
す。「別れは必ずやってくる」と、彼らはよく言っていました。「いつ親が帰国すると言いか
わからない。そろそろ帰国することになるかもしれない」という恐れを常に持っていたわけ
です。その覚悟ですね、別れに対する「諦念と覚悟」。彼らは何度も名古屋の中部国際空港
に仲間を送っていく。でもその時には、「不思議と涙さえ出ない」、「別れは最初っから分か
っていたから」と言います。仲間はいつか帰国するっていう諦めがあるんですね。それから低

学歴に対する諦めがあります。よく彼らは「一二歳で働いても、じゃあ一六歳で働いても工場でしょ」って良く言います。「一六歳で、中学校卒業したって、結局働くのは工場だったら、[中学出てもお出なくても] 同じじゃん」というんですね。働いている青年たちは、ひどい状況で労働に携わっていて、就労中に怪我をしても、病院に行かせてくれないと、労働環境のひどさを私に訴えてくるのですが、いざ、派遣会社に連絡しようとする、「いいよ、どうせ無理だよ」って言って、途中でやめてしまう。不当に解雇されたり、工場で怪我をしてひどい傷を負っているのに絆創膏だけ付けて終わりと放置されたりする。また、地域での差別に対する諦めというのもあります。「そういうもんだから」と諦めてしまう。

また、それから先ほども言いましたように、路上調査の語りとそこから展開したフォーカス・グループ・インタビューでさらに明らかになったことは、「諦念と覚悟」の他には、「疎外感」ですね。親世代のエスニック・コミュニティへの不信感が増し、それから家族の中の疎外感につながります。そもそもブラジルではあったはずの家族のアイデンティが失われていき、親世代と共有できない状態になります。

『孤独なツバメたち』のその後　　ここで、『孤独なツバメたち』に出ていた青年たちの話をします。一人は鈴木ユリです。先ほどアンジェロ先生がおっしゃられたように、匿名化して話す

のが普通ですが、今日の事も彼には、きちんと伝え、全部了解を取って話をしています。彼自身も自分の状況は伝えていきたいと言っています。二〇〇〇年の『孤独なツバメたち』以降の状況ですが、彼が二〇一三年に再び大麻所持と窃盗で、名古屋で裁判が行われました。その時に、私も彼のために情状証人として出廷して、刑務所に行かせないために身元引受人となり、彼を裁判所から連れて帰りました。そのため、二〇一三年からしばらく彼と同居していたのですが、彼は二〇一六年に再び、組織的な窃盗グループの主犯格として、拘束され五年間の懲役を受けます。二〇二〇年、彼は帰国しています。帰国後ですね、彼から送られてきた詩のようなものがあります。

団地の合間一人歩く少年、気が付けばあれからもう一五年

エアフォースワンにトライバルのTシャツ、いつもの場所で仲間を待つ

場所は浜松夜の七時、ヘッドフォンから流れるノトリアスBIG

ラップとストリートの合成DNA、が必然に生み出すアウトローな人生

ごめん母ちゃん、本当にすまない、理想の息子にはなれそうに無い

……

懲役五年よく耐えたよね

支えてくれたファミリーがいた、それがあってこそ前に進めた

誇りを持って彫った刺青我が家 SEM LIMITES 栄光の日々

ノトーリアスB I Gはラッパーです。「アウトローな人生、ごめん母ちゃん、本当にすまない」と、いちばん下に書いてありますね。「SEM LIMITES セイム・リミッツ」、これは彼が作っていたギャング集団です。このギャング集団は彼が、RとCという二人の青年と作っていたんですね。この二人については、あとからまた紹介しますけれども、指名手配されて、ブラジルへ海外逃亡しています。彼らのギャング集団が、バラバラになっていき、精神的に追い込まれていきます。

時間の関係もあるので、彼が送ってきた詩の全部は紹介できませんが、刑務所から出所して、ブラジルに帰国して、三〇歳になった時に、私に読んで欲しいとこの詩が送られました。彼が刑務所から出てきて、これから帰国するっていうその前日に、「さわやか」という静岡県県のハンバーグ屋さんに行って「さわやか」を二人前食べて、帰国しました。この街に対して彼は、「 우리가 ホームタウン 浜松」という言い方をしています。「さわやか」は静岡で育った

彼にとって忘れられない味でした。最近も彼とは、連絡を取っているんですが、やっぱり浜松なんです。彼は。刑務所に、懲役で五年、その前の少年院時代も決して順調ではなかったし、辛い思いばかりをしていても、それでも浜松なんです。

パウラはこれも『孤独なツバメたち』で会った青少年の一人です。彼女がよく言っていたのは「丸の内のOLになりたい」っていうことだったんです。帰国した今、その夢を叶えました。つまり、彼女にとって「丸の内のOL」は、ブラジルでは、「サンパウロのパウリスタ通りの企業街で働く」ことです。彼女は中学中退から、帰国後、大学卒業まで行き、世界四大会計事務所であるKPMGで働いています。写真（掲載略）と一緒に写っている彼のことですが、彼女にブラジルに会いに行った際に、その青年を紹介してくれたのですが、この青年と今年の六月に結婚することになりました。

佐竹エドアルドに関して、やはり、彼は大麻の不法所持で、まあいろいろ問題があったわけですが、逃げるようにしてブラジルに戻りましたが、「いつでも浜松に戻りたいと思っている」と心の内を明かします。しかし、彼は日系四世であることから、先ほどアンジェロ先生からのご指摘があったように、旅行で来日するしかありません。それでも、一〇年経っても彼の気持ちはそのまま浜松にあるんですね。「ここ（ブラジル）では友達はいらない」

と言っています。彼は今、仕事はしてるんですけども、結局、鈴木ユリも、佐竹エドアルドも、浜松での小学校時代、中学校時代の仲間集団、コミュニティを、そのまま帰国後も引きずってるんですね。

最後の一人は、「セイム・リミッツ」のメンバーだった青年です。彼は『孤独なツバメたち』には出てませんでした。彼もふらつと来て、私の家でしばらく同居していました。今、スケーターとして、「Teme Gang」、これは何と読むかというところ「てめえギャング」と発音します。浜松や、名古屋や、豊橋でスケータインクしていると、警察から、「おめえギャングか」と言われ続け、チーム名を「てめえギャング」にしたわけです。これは最近、名古屋に行って撮影した映像（掲載略）ですね。彼は、自分はスケーターだったから、鈴木ユリとは違う人生を歩めたと言います。彼は、浜松市にスケートパークを作ってほしいという要望を出していて、一緒に活動をしたんですが、彼の言うことも一理はあるかと思えます。「警察にも俺らの邪魔をされない、週末家族で行っても楽しく滑れる場所が欲しい」。これは要望書に記載した彼の言葉です。彼は、浜松駅周辺で滑り始めて、それで年上のブラジルのスケーターたちと出会い仲良くなっただけで一緒に滑り始めた。夜の街が好きすぎてスケボーの合間に酒を飲んだりして、そこに悪い連中、日本人の悪い連中が入ってきて、ドラッグだとかい

ろんなところに犯罪に誘われて、犯罪に手を染めていく。「もし、公認のスケートパークがあり、そしてそれが健全に運営されていれば、ぼくらはそんなふうに勧誘されたり、ヤクザとの接点を持つこともなかった」というのが彼の主張ですね。もちろん、彼が作っている「Teme Gang」は、まったく健全なスケーターたちの集団です。先ほど言いましたように、彼らは、未だに、孤立、社会から孤立し、自分たちの社会集団をどんどん狭めていき、解決できない問題を抱えていくという状況があるのかなあとというふうに感じてしまいます。

時間の関係もあるんで、早くいきますね、はい。あの二〇一九年に「浜松市にスケートパークを作ろうプロジェクト」というのができるんですね。これは彼と、あるいは彼らスケーターたちが頑張ったんですけども、結局、実現できませんでした。ここに彼が書いているんですが、二〇二〇年のオリンピックでスケートボードが初めて競技になった日本では、スケート文化が理解されていないと言うんですが、彼の言い分もよく分かるんですね。彼は三〇歳—いや彼、二九歳か—になって、新しいそのファミリーを、社会集団を作っている。居場所を求めるといふその葛藤と諦念が依然として続いていると感じます。

マイノリティ・ユース・ジャパン 『孤独なツバメたち』の後にもっとも力を入れたのが、「マイノリティ・ユース・ジャパン Minority Youth Japan」という組織でした。第二世代は、

第一世代からも孤立して、自分自身の気持ちをごくに持っていたらいいか分からない、という状況の中で、四世問題などさまざまな差別を受けています。それを彼らで解決する取り組みを彼らでスタートすることが必要で、「いつも支援ばかり受けていたらだめだ、自分たちで解決する」と「マイノリティー・ユース・ジャパン」を設立しました。鳥光先生におっしゃっていただいたように、自分たちで、彼らの存在とか、責任を見つめ直して多様性を認める社会へ変革する活動っていうのを彼らで主体的にやっていくべきじゃないのかという、彼らから提案を受けて、彼らと一緒に始めたものです。

彼らが、まず取り上げたのは帰国支援事業でした。二〇〇八年のリーマンショックでほとんどの外国人労働者が雇用から外される。だが、日本政府としては彼らにそのまま日本滞在中し続けてもらっては、お金が嵩むので困るという状況の中で、札幌で頬をたたいてですね、三〇万出すから帰国して欲しいという趣旨で作られた法律があるのですが、それが帰国支援事業ですね。この写真（掲載略）に写っているこの二人に関連するのですが、当時二人とも未成年なんです。二人のうちジュリアネは、帰国支援の事業を使って帰ったんですね。もう一人、ルカスは、自力で帰りました。彼の両親が、どちらも仕事がないから帰国すると決めた時に、彼は独自に、つまり三〇万円を使わずに帰ったために、いつでも戻れたんですね。

それで、戻ってきたんですが、その前に、この二人はブラジルで結婚したんですね。ところが三年経つても、この事業は実は三年という約束だったはずですけども、これについてはアンジェロ先生が本当に詳しいと思うんですけども、ジュリアネは、ブラジルに帰る時に帰国支援事業を使ったために三年経つても再入国が果たせなかったんですね。それに対しておかしいじゃないかっていうふうに立ち上がったのが、「マイノリティー・ユース・ジャパン」のメンバー、特にジュリアネです。それにルカス、ガブリエラでした。ジュリアネは、法務省に対して裁判を起こしたのですが、彼女に対して一転して再入国許可が出たんですね。つまりこのまま裁判を続けても負けるといふふうに国は判断したわけですね。彼らの頑張りです。第二世代の頑張りで乗り越えたんですね。私は、デカセギ二世たちに、これを一つの成功事例として、自分たちがこの国で頑張れば成功できるんだというのを感じてほしかった。この状況の中で第二世代の青年たちも、この裁判に積極的に参加するのかわからないのかなど、いろいろ話し合いを持ちましたけれども、僕はその時、支援者として彼らの議論を見つめながら頑張つてほしいなと思つてました。一転してこういうふうな再入国を認めるような判断を法務省はしたわけですが、これはまさに、全然期待してなかったことでした。こういうふうになるとは思つてもいませんでした。私ははただ、この過程が大事なんだということ

で、伴走者としてそばにいただけですけれども。

この写真（掲載略）は、浜松学院大学を使って、国籍に関係なく開催したフットサル・カップの時の写真です。あのフットサルにしろ、サッカーにしろ、ですね、彼らは地域の少年団になかなか入れないんですね。以前は「アンドリーニャ」というフットサルのチームを作っていました、彼らが青年になってもう一度きちんとリーグを作りたいと、彼らからの提案で始めたフットサルです。

それから、パプロ（パプロ・ナダヨシ・ロリン）についてですが、当時は民主党政権下だったので、中川法務大臣を呼んで、先ほどから問題になってる在留資格要件を明確化するための対話を行うということに、彼が頑張りました。それからもうひとつは、二〇一二年の第四六回の衆議院議員の総選挙の時、静岡県内の候補者に質問状を出しました。選挙権がない彼らが多文化共生に関して、候補者に対して、彼らが日本の社会の中で活躍できるような様々な質問を書いた質問状を出したのです。政治的な活動とも言えるとは思いますが、これも、はい。これはいったいなんだったんだろうと今になって思います。今、影も形もないですよ、これ。彼らと一緒に頑張ってきたこの「マイノリティ・ユース・ジャパン」っていうのはいったいなんだったんだろうと今でも思います。つまり、なんでこれは継続できない

かつたんだらうと。で、やっぱり、その最初に申し上げました「諦念」というんですかね、諦め。中川大臣を呼んだらすべて解決するのかっていうことへの疑いですね。この時、アンジェロ先生もいらっしやったんですが、中川大臣との話がかみ合わないんです。何がかみ合わなかったかというと、要は、大臣によれば日本の社会にはもう、メリトクラシーが成立している、つまり、頑張ればやれるというシステムが出来上がってる、やらないのは君たちじゃないのということなんです。頑張れば、君たちが頑張れば社会的な上昇はできるんですよ、と中川大臣は言うわけですね。でもそうじゃないんだと、彼らは言う。それでも結局、中川大臣も一部、差別は認める発言をしたんですけれどもね。その後、内閣府の定任外国人の政策推進室の参事官補佐、内閣府大臣官房総務課中川大臣室、内閣府中川特命担当大臣秘書宛てに、彼らを書いた文書を送ったんですよ。それを総括して当時の内閣府に送ったんですけども、反応なしですね。こういう中でだんだんと彼らも疲れてきて、「もう無理だよ」「何やっても無理だね」と、やっぱり一人抜け、二人抜けて、いったのかなあと思います。

『A Escolha』 それから、これは『A Escolha (ア・エスコーリャ)』という、私が作ったドキュメンタリーのポスター(掲載略)です。これ実は公開してないんですね。一度、明治学院大学で上映して、それから本学で、カリフォルニアのバークレー校と国際教養大学の学生

さんが来た時に、上映しました。これは配給していません。ストーリーは、二人のデカセギ二世代の女性が、母親になることに関して、それぞれの選択をするというものです。一人は、日本に残る決心をして、日本で育てることを選びます。彼女は大学も出ています。彼女は大きな浜松市内の信用金庫にほぼ内定が決まっているような状況でした。彼女は、私はここで歯を食いしばってでも、日本の社会で戦ってそして子育てをしていくという判断をする。他方、彼女の親友は、児童労働の経験があつて、日本では学歴がない。彼女は、この子は日本では育てたくない、子どもに私と同じ思いをさせたくないと言ふことで帰国するんですね。この二人の葛藤を描いたドキュメンタリーです。日本での子育てを選んだ彼女はその後、県内大手の信金に無事就職して子育てをしている最中ですが、いろいろなあつてこれは公開しないという形を取りました。今、彼女はものすごい葛藤の中にいます。実は先日にも彼女に会ったんですけども、子育てについての葛藤を抱えています。

森茂…そろそろまとめただけですか。

津村…はい。私が思っているのは、私は、支援者でもあり研究者でもあるという事で、どういふふうに寄り添っていくのかということ。寄り添っていく中で、この当事者である彼らが、なかなか立ち上がれないのはなぜなのかと考える。どんな仕掛けをしてもその彼らの持つて

いる諦めというか、それが彼らが立ち上がることを困難にしていると言うことが一つあります。で、もう一つは、パウラにしろガブリエラにしろ、女性の適応力っていうか、たくましい。彼らはデカセギですけれども、彼女らが見事に適応しながら頑張っていくという、その凄まじさというか、見ているわけです。第二世代の問題をお話ししてきましたけど、今、第三世代の問題も、出てきています。私にできることは、寄り添うしかないのかなあと思いつつ、その一方で私がやってきたことはいったいなんだったんだろうとも考えます。何も解決はしてないし、何も前に進んでない。それでもただ見守るしかないのかなというのが、今の私の気持ちです。以上です。すみません、長くなりました。ありがとうございます。

質疑

森茂…はい、津村先生ありがとうございます。それでは今の津村先生のお話に対して何か事実関係等、簡単な質問があれば発言していただければと思います。

森茂…もし今すぐに無いようでしたら、鳥光先生のほうからチャットの方でアンジェロ先生にも質問が出ていましたが、その事もちょっと聞いていただけますか。

鳥光・宗教のことを、お話しされてたと思うのですが、日本の新興宗教みたいなことなのかなってこともちょっと想定したりはしたんですけど。あるいはカトリックか。ちょっと、そのへの事例を教えてくださいただければというふうに思いました。アンジェロ先生よろしくお願いたします。

アンジェロ・イシ・それこそ話すと長くなりそうなので、短く答えたいんですけど。まず、画面共有しているこの二〇一六年に僕が書いた、ジョアン・トシエイ・マスコ、ちなみに実名ですね。「第二の故郷で挑戦する日系ブラジル人」というこの『ひとびとの精神史』という著書に入っている私の章での彼の「精神史」というのは、マスコの場合、日系の新興宗教がキーポイントでした。彼は「生長の家」という非常にブラジルで有名な、日系人の間で非常に信徒が多い代表的な新興宗教ですね。本当に彼の語りの中からも、ほぼすべての場面でこの宗教信仰の影響というのが読み取れるわけですね。ただし、実は人数的には在日ブラジル人全体の中ではマイナーです、「生長の家」は。で、鳥光先生のご質問のカトリックも人数的にはマイナーなんです。人数的に圧倒的に多いのが、いわゆる同じキリスト教の中の福音派と言われる、いわゆるポルトガル語でEvangelicoと言いますが、このカトリックじゃないほうのさまざまなキリスト教の宗派が無数にあります。そして、そのほぼすべての

宗派が日本各地で教会を設けたり、リーダーも信徒もいて、森茂先生もご存じの日本移民学会の研究者の中でも山田先生とか、キリスト教の在日ブラジル人に関する論文も出されています。だから、いわゆるカトリックじゃないほうのキリスト教の影響というのは非常に大きいし、やっぱりそういう特定の宗教信仰を強く信じている人たちというのは、なんか不思議なくらい、どんなテーマについて僕らがどんな質問を投げかけても揺るがずその信仰と関連する発言を返してくるわけです。たとえば、デカセギという経験の意味付け、お金に対する価値観とかですね。人生観、子育て、そのすべてにおいて強い影響を及ぼしているというのが僕のこれまでの経験です。たとえば、ついこのあいだも、ポルトガル語と日本語の通訳を務めている人たちが草の根のネットワークを作って、研修会みたいなのを開いて、僕がゲストスピーカーでその人たちにスピーチをしたんですけど、その質疑応答の中でも僕はびっくりしたんですけど、突然、本当に唐突にある参加者が「いや、アンジェロ先生、公明党についてどう思われますか」という質問をぶつけてくるわけです。で、僕は、おお、なんで突然、公明党なのかと、で、すぐにピンときて、この人は創価学会のかなり熱狂的と言ったらちょっとマイナスのネガティブなニュアンスがありますけど、信徒なんだなと。で、彼女はもう熱く、いかに公明党が日本における外国人の権利の保護について熱心なのかというよう

なことも一生懸命語っていましたが、だから、たとえば僕らが聞き取りがき得る潜在的には無数にいる人たちの中で、たまたま、鳥光先生がその彼女に話を聞くという、一期一会的な運命的な出会いになった場合は、おそらく僕の子想としては、その創価学会に対する信仰を抜きにして、彼女の人間形成とか、彼女の自己形成などは論じえないほどの、やっぱり、強い影響力を有すると思います。そういう意味で僕はレジユメでああいうふうに書かせていただきました。

森茂…はい、ありがとうございます。時間が結構、押してしまいました。前半ですね、あと池田先生のほうから指定討論者としてのコメントをいただいて、それでそのあと休憩に入りたいと思います。池田先生からのコメントに対する、それぞれの報告者からのレスポンスは休憩の後していただければというふうに思います。池田先生、お願いいたします。

池田…はい。すいません、特にあのレジユメとかは無いんですけど、おふたりのお話を聞いてからと思って、なんとなく事前にレジユメは少し目を通させていただきましたけれど。時間どれぐらい、一五分ぐらい話せば…。

森茂…一〇分か一五分。

指定討論

池田…なるべく急ぎます。まず、この問題考えるときに社会とか、国家とか、あるいは政策と
いったマクロなレベルの視点と、とてもミクロな視点とが交差する、そういう思考の枠組み
が一つあるなと思いました。本当に国自体をどう捉えるのかとか、われわれが社会をどう
作っていくのか、社会の作られ方みたいなレベルで、現実的にどうやって政策を練ればいい
のか、法律を作ればいいのか。そういうレベルと、それとは別に、生活をしている土着のと
言ったらいいのか、今生きている地域社会の中でのある種の相互扶助みたいなあり方、その
両面からの検討が必要なんだろうなと思っています。そこで、まず、ちょうど、お二人の話
から出てきたことで、トピックス的に私の言おうとしていたことと関連させて、いくつかお話
をします。ブラジルの警察からの職質が多いうって話がありました。私がある県で外国籍者の
教育問題について関係者に話を聞いた時、地域でやはりこういう問題が多いと。で、いわゆ
る外国人労働者といわれる人たちの子どもたちの教育をどうするかっていう時に、わりと大
きな補助金がついて、しっかりと勉強をみていくシステムが作られていたんですね。いつた
いこの予算はどこから出てるのかって聞いたところ、警察予算ですって言うんですね。文

科省とか、教育委員会ではない、警察の予算なんですよね。つまり、警察が困っているわけです。いろいろに犯罪に巻き込まれることもあって、それを防ぐために、警察がそういう予算を出して教育の機会を保障しているわけです。これは、なるほどと思う反面、これでいいのかという思いがします。実際に学校の先生が指導もしているのですが、本当にこれだけちやうと削られちゃってももったいないから、なんとかやってるんですっていう話を聞きました。

最初に鳥光先生のお話の中にも少し出てきましたが、レジユメにも出ていましたけど、右田さんという女性がいて、やはりブラジルから九歳で日本に来たんですけれど、右田マリアナ春美さんというかたです。『多文化共生レッスン』と題した本も書かれています。私もよく存じ上げていますが、彼女、小学校の時に日本に来て、知ってる日本語は「水」くらいしかなかったということなんです。

まさに生きていくために必要な言葉だったわけです。差別を受けながらも、中学校に入っ
て、ある先生と出会って、急速に変わっていくわけです。当時、彼女はともかく自分がいじめられたり、差別されないようにするために日本語をちゃんと自分が話せるようになりたい

というふうには、ある意味追い込まれて同化主義的な形になっていたわけですね。自分と同じ境遇にある子たちと話をしなくなっていくわけです。日本人の子ばかりと話をしていく。最終的に彼女は大学まで行って日本語の教師になるんです。今は、教員を辞めて地元で居場所づくりとか、日本語指導とかの活動を自分でやっています。そういう彼女を多文化共生的なものに目覚めさせたのが、部落解放運動に関わっている先生たちだったんです。そのような運動を支えているある教員が彼女に声をかけたんですね。そこには在日、韓国、朝鮮の子どもたちもたくさんいるわけですね。つまり、国籍とか、日本人とか外国人とかってそういう問題ではなくて、報告の中にあっただけでなく、つまり、同じブラジル人だから気持ちが変わるんじゃないかとかということではなくて、それよりも、いま自分がどういう社会環境で生活しているかっていう、そっちの結びつきのほうがかなり強いということなんです。彼らのアイデンティティというか、そういうところでもつながりが強いんですね。

最初に私が、フランスの移民教育を研究しているという話を森茂先生から紹介していただいたので、ひとつの例示としてフランスのことを少し話したいと思います。まず政策立案していくときに、外国籍や出身地という点ではなく、いま暮らしている社会環境とか、家族関係とか、広く言うところと社会階層というところに着眼をすることの方が現在では一般的かと思

ます。この点にフランスが気付いたのが八〇年代に入ってからですね。六〇年代から七〇年代、アフリカ諸国のさまざまな独立があつて、旧フランス植民地が独立国になって移民としてフランスにたくさん入ってくるわけですから、その時には、やっぱりフランス語をしっかり教えていくことが重視されていきましたし、ほぼ同時に、母語文化を大事にしましょうという政策も出されます。ただ、いずれの政策も、結局、彼らとわれわれと違うんだよねっていう、そういう大きな枠組みの中で作られていたわけです。しかし、そうじゃないんじゃないかって気が付いて新たな観点から政策を打ち出し始めたのが、八一年からですね。どういう地域で、どんな仕事をしていてとか、どういう人間関係の中で、彼らは社会生活を送っているのかに着眼すると、そこは国籍とか、出身地とかではなく、違う要素で彼らを見ていく必要があるということがわかってきたわけです。その裏側には、政権交代があつたんですね、フランスの。だから、日本もそういう政治や政党の状況を絡めて分析する必要もあるかもしれません、いわばマクロな視点で。七〇年代のジスカル・デスタンから、八一年にミッテラン政権に代わるわけです、大統領が。社会党政権に変わるわけですよ。そこで急速に今みたいな問題の捉え方が出てきたわけです。あとは、ちよつとミクロなレベルになりますけれど、われわれ自身がそれこそ外国人と呼んだり、何々人、たとえば、フランス人とか、ブ

ラジル人、アメリカ人というふうに国籍に人を付けて呼んでますよね。で、この呼び方にあまりにもなじみすぎていて、違和感をもつ人は多くないかもしれませんが、人を認識する時に、国境線を前提にした認識の仕方をするっていうこと自体を相対化しておく必要があるかと思えます。フランスとの比較で言うと、たとえばアメリカだと、たとえば日系アメリカ人とか、イタリア系とかって言いますが、その何々系っていう発想がフランス共和国にはない、存在してないんですよ。日系フランス人って言う方は絶対にありえないです。誰もそんなふうにはいわないし、そのような発想で考えたこともないと思うんですよ。つまり、これがいちばんマクロなレベルですけど、いわゆる多文化主義を取るのか、共和国主義を取るのかっていう問題です。この数直線上のどこかにいろんな国は位置するのもいいんじゃないんですけど。アメリカはよくサラダボウルと言われますよね、トマトやレタスやいろんな物があって全体ができてきているけど、結局トマトはトマトだし、と認識される。そこには誰がトマトと認識したかっていう問題もちろんあるんですけど。フランスは、そのような出自はまったく問わないわけですよ。今フランスに生活してる限り、フランス市民だと捉えるわけです。で、フランス市民である限りいろんな人がいるから、いろんな人と調整をしながら生活していく、だから常に文化は変わっていくっていう捉え方をする。で、こ

の両方には、利点と欠点があるんですけど、そんなふうには国の枠組みとか社会認識の仕方みたいなことも問わなきゃいけなくて、そこからどういう政策がいいのかっていうことも出てくるのではないかと思います。

もうひとつ、保見団地の話が出てきましたが、フィールドワークの授業で保見団地に私も学生と一緒に行ったことがあります。さまざま文化的なギャップみたいなのを経験していく中で、どうやって友達関係を作っていくのかという点にも着目したいと思います。自分がこんな差別を受けてきたんだとか、自分はいまこんな生活をしているんだとか、そういうことを友達同士でどの程度話せるのか。このような内容を話す相手がいるのかっていうことは、すごく大事なことだと思います。部落解放運動の中でよく聞くことなんですが、もちろん、在日、韓国、朝鮮の人からもよく聞くんですけど、ようやく自分の親しい友達に自分の境遇やこれからどうしたいのかっていう不安も含めて告白したときに「いやそんなの関係ないよ、今まで通りお前とは友達だよ」って、大概そのような対応されると聞いたことがあります。「関係ない」じゃなくて、この日本で起きている話であって、みんなに関係しているんですよ。「今まで通り友達だよ」というのはわかりきっているわけです。そうじゃなきゃ、こんな内容を話すわけではないんですから。これを話して友達じゃなくなるような人

にはこんな相談をするはずがないですよね。だから、「関係ないよ」じゃなくて、この大きな問題をあなたと一緒に考えたいっていうメッセージを出したんだけど、ある意味それを受けた方が道徳的というか、そういうことで左右されてはいけないんだっていう何か学校教育的なものがあるのかもしれないんですけど、「いやそんな関係ないよ」って、つい応えてしまうんですよ。彼らが苦しんでいるのはこの日本社会の在り方そのものの問題なわけだし、大いに関係ありなんだっていうことをどうやって伝えていけばいいのか。そういう教育実践上の問題もそこにはあるかなというふうに思います。まだまだありますけど、一応、まずはここまでしておきます。整理して言えば、ミクロなレベルの相互扶助と、マクロなレベルの政策論、たとえば予算をどうするのかって問題と、このダブルの問題があって、だからこそ、いろんなレベルで研究し、かつ支援し、あるいはともに向き合うことが必要なテーマだなというふうに思っております。またあとで議論の中で参加したいと思えます。以上です。

森茂…ありがとうございます。池田先生のほうからは、マクロなレベル、ミクロなレベルから考えなくてはならない問題について提議がありました。マクロなレベルでは、国籍を前提に

して、人を判断することの意味について、それからミクロなレベルではその具体的な生活のレベルから、学校生活の問題についても話してくださいました。ちょっとこれから休憩に入りますので、お二人の先生には今、池田先生へのコメントについて少し考えていただいて、その事についてお答えしていただくとこから次のセッションを始めたというふうに思います。

全体討議

アンジエロ・イシ：僕からでいきましょうか。

森茂：はい、はい、お願いします。

アンジエロ・イシ：はい、非常に共感しながら、池田先生のコメントを聞いていました。たとえば皮肉なことに、いわゆる多文化共生的な趣旨の施策というか、政策の予算が実は警察からきていることへの違和感というのは本当に僕もそうだなというふうに思っていて、実は、いわゆる受け入れ社会側のそれに関わっている日本人のスタッフが英語以外のマイナーな言語を学んでいるかという細かい各論だけに注目してみると、語学研修にかかるお金も時間もエ

ネルギーも、圧倒的に警察関係者が他の各省庁の職員よりもいちばん熱心にポルトガル語を勉強しているという事実を僕らがどう、これを解釈し、捉えるのかということです。そういう警察関係者にポルトガル語を教えているリーダーがたまたま僕の親しい友人なので僕も事情に詳しいわけですが、本当はすべての省庁の人たちがこの警察の人たちと同じようにポルトガル語を熱心に勉強すれば、一気に国レベルでも多文化共生的なよりフレンドリーな政策が進むのになあとさえ、僕は皮肉を込めて思うわけです。これに関連して、もう一点注目を促したいのが、そもそもすごい打ち上げ花火のように日本政府がこれからは外国人労働者の受け入れだけではなく、いわゆる共生社会のための総合的対応策というのを新設して、より充実した政策をするんですよというのが、二年前に打ち上げられたのですが、これも考えてみれば、法務省が主導でこの共生社会関連を担っているということを本当はマスコミも、あるいは研究者も評論家も、もっとこの点を厳しく牽制というか、追及してほしいんだけど全然弱いですね。これを疑問視する声というのは。だって、一方では、名古屋の収容施設で入管庁の人たちが、ああいうひどい対応で人を見殺しにしておきながら、その同じ法務省が共生社会を担っているということに対する疑問というのは、あまりきちんと検証されていないように思います。で、あともう一点コメントへのリプライというか、いわゆるカミングアウト

ト、誰かがカミングアウトした時の、リアクションとして今まで通りで関係ないよという、この答え方の問題性というのをよく指摘してくださったと思うのですが、そこで問われているのは、これはなにも僕がこれを述べるまでもなく、すでにみんなご存じで多くの論者が指摘しているように、いわゆる受け入れ社会側、鉤括弧付きの日本人の当事者性なのであって、これがあまりにも希薄なんですよ。つまり大学で教えていても僕は常々この違和感を毎年抱くわけですけど、たとえばアメリカで起きたアジア人に対する差別だとか、アジア系の人々に対する差別とかを真剣にみんな考えたりして、でもそれが翻って自分事として、つまりじゃあ日本社会でのマイノリティに対する偏見とか差別はどうかというふうにはなかなかつながらない。その「つながらない」のは、大学の教育だけではなく、高校までの教育、小中までの教育の中でいったい何がどう教え込まれた、もしくは何がどう教え込まれなかったから結局はみんな、こんなにも鈍感で能天気でいられるのかという、つまり、その当事者性の希薄さというのは本当に僕もなんとかしなければと。おそらく、この希薄さに対してそれこそ諦めムードというのがあって、津村先生がおっしゃったようにせつかくのいい活動であったたとえばマイノリティ・ユース・ジャパンなどが結局は長続きしないというのは、いくら一人のよき理解者である津村先生だけが孤独なランナーとして、孤独なサポー

ターとして味方をしてくれても、なんか完全なるアウエイ感を最初から最後まで彼らは抱いていたのではないでしょうか。余計な一言を加えますと、津村先生のお話に出ていた中川大臣、本当に僕が大好きな数少ない味方なんですよ、国会の。その数少ない貴重な味方でさえも、ご指摘のとおり、やはり理解度には限界があるのであって、たとえば僕がどこで別の意味で限界を感じたのかと言ったら、彼はすごく強く日本語教育推進法という、もつと日本語教育を本格的にちゃんと進めるための推進法というのにすごい力を入れてくれた政治家なんです。それ自体は一步前進で素晴らしいことですが、私を感じた限界が何かと言ったら、発想としては結局は日本に來ている外国人たちが、日本語さえきちんと覚えればなんとかなるし、大きな問題は解決されるというのが（推進法の）発想の根底にあります。僕は彼と話す機会があつて、日本語教育推進法もすばらしいんだけど、その一方で、やっぱり母語教育というか、継承語、たとえばブラジル人の場合はポルトガル語もなんとかしてほしいと話したら、いやそれはわかるけど優先順位としてはまず日本語だと、で、そのあと、ゆっくりじっくりそつちの方も、というふうにおっしゃっていました。これはたぶんあと二〇年じらされ続けます、僕らは。味方でさえも僕らをじらすと思うんですね。

森茂…はい。ありがとうございます。津村先生のほうからはいかがですか。

津村…はい、いろいろあるんですけども。

森茂…うん。

津村…まずは、池田先生がおっしゃられた、その国籍だとか、民族だとか、言語だとかにとらわれた支援は非常に特定のであり限定的であるということとは強く感じます。この人たちが、こういった特定の不利益をこうむっているので、こうしなければいけないという主張はやはり全体的に見るとそれは非常に限定的に収まっているのかなあという感じはします。さらに言えば、たとえば『孤独なツバメたち』に関して、大学教育まで受けた二世代の中には、非常に否定的な人たちがいます。つまり、私たちを、あの人たちと一緒にしないでくださいという発言があるんですね。日本社会に見事に同化して、適応して、そして日本の社会で生きるすべを、あるいはスキルを、あるいは知識を持った人たちは、そういった人たちを否定する傾向が強くあるんですね。たとえば、インターナショナルスクールを設立した大学生たちがいるんですが、その時に初代の校長がマイノリティの大学生だったんですけれども、彼女が何をしたかというんですね、そこに通ってくる子どもたちの保護者を叱りつけるんですね。「あなたたちのやり方だから、ダメなのよ」って。つまり、自分達は日本の社会に見事に適応して教育を受けている。私たちができたのだから、あなたたちができないのはおかしい

よっていうふうな言い方をする人たちが一方にいるということですが、これは、教育委員会にも、実はいるんですね。浜松市は、外国人児童生徒に対する日本適応支援とか初期日本語の支援とか非常に充実してるんですけども、バイリンガルの人たちが支援員となってる場合、子どもたちに対して、こうしなきゃいけないのよというように、日本の社会側に立つ人たちが非常に多くいるということが一つあります。つまり、自分たちの固有の問題から離れて、社会に出て広い視野で見たときに、特定の社会、文化集団に対しての問題意識に気づかず、日本社会の代弁者になってしまう人たちも今いっぱいいるという状況はあるかなと思います。それからもう一つは、継承語、あるいは母語の必要性はむちゃくちゃあると思うんですね。私の勉強してるのは第二言語習得というところで、やっぱり母語から第二言語に転移していくという事で、まずは母語できちんとした根っこを作ろうということなんです。先ほど、中川大臣の話をさせていただきましたけれども、先日、浜松市の鈴木市長と話した時、これだけ、多文化共生社会でありながら、日本語がまず第一っていうんですね。つまり、継承語や母語のアイデンティティを強化することが実は、結局は、日本語の能力に転移し、学力定着になっていくと言うところを読まないんですね。そこが政治家のやっぱり理解の限度があるのかなあと、鈴木市長に対しては本当に、あれだけアドバルーンを上げながら多文化共生社会と言いな

ら、そこに限界、やっぱりダメだなあとというふうに思った次第です。まだまだいっぱいあるんですけども、少しここでやめておきます。すいません。

森茂：はい。ありがとうございました。今お二人から最後に、母語維持とか母語保持の問題出てたんですが、アンジェロさんのレジユメには、バイリンガルの公立学校設立を設立すべきという非常に挑発的な意見も出てたんですが、池田先生は行政の専門家ですが、この事についてはどのように考えられますか。

池田：いやー、それは、まずバイリンガルの社会を作るには、まず政治家がバイリンガルでしゃべれないといけないですからね。国会で日本語プラス、もう、一個の言葉で政策提案できなきゃいけないんでしょうけど。これはこれからだと思えますけど、なんていうのかな、難しいな、その公教育の中で、問題点はわかります。日本の学校教育は日本語で日本人を養成する学校なので、そういうふうに学習指導書に書かれちゃってるっていう大問題がありますね。日本語以外で学ぶチャンスはもうまったくないわけです。若干、補習みたいなものがあるだけなので。だから、よく生活言語と共住言語って言いますが、そこは今すぐパツとは答えませんけれど、言葉が大きい問題があることは確かです。たんに母語保障、継承語ですよ。いわゆる母語で一応っていうと母語保障は決定的に大事ですよ。それはアイデンティ

テイに関わる場所なので、まずそのへんをちゃんとやらないといけないかなあていう感じはしております。フランスでもこれは七〇年代にも始まって、ずっと今でも続いていますね。ただ、移民の経歴がフランスだと何十年も経ったので実際には母語が今度外国語みたいになっちゃってという、母語じゃなくなっちゃってという時代に入ってきてちゃってますけれど、でもちゃんとそこは、そこは両方やってますね。以上にしときます。

森茂…はい、どうもありがとうございます。今日、せっかくたくさんの方が参加して下さっているの、今日参加して下さった方の中で何かご意見、ご質問や、何かがあれば積極的に発言をしてください。いかがですか。どなたでも、どんなことでも。どうでしょうか。

アンジェロ・イシ…もし皆さんのほうからなければ、僕から質問、ほかのパネラーに聞きたいことがありますけど。

森茂…はいどうぞ、はい。

アンジェロ・イシ…はい、まず鳥光先生がご発表の中でおっしゃっていた、趣旨説明でおっしゃっていた、Cさんの話がデータとしてあるので、いわゆる比較材料として外的な諸条件の近い事例との対比とおっしゃっていたわけですね、つまり、ここでやっぱり僕が興味があるのが、どういう意味でこの条件が近いというのを優先していけばいちばん有益な対比がで

きるのかなあというところですよ。つまり、さつきから出ている一連の話の中では、まさに、このジレンマがそこにつながるような気がしましたね。あと津村先生に聞きたかったのが、僕の発表で出た、たとえば、ルマさんの『レモン』とか『ヒョジョンへ』をご覧になっているかどうか、で、その感想を聞きたいなあというのがあったのと、あと津村先生が制作されたこの『ア・エスコリーヤ』の方はちよつとまだね、いろいろあんまり一般公開はできてないとのことですが、でも、『孤独なツバメたち』のほうをたとえば、ブラジル人たち、いわゆる鉤括弧付きの当事者であるブラジル人たちに特化した試写会みたいなのがなかったかどうかで、どういうリアクションだったのかというのをお尋ねしたいですね。

森茂…はい、鳥光先生のほうからよろしいですか。

鳥光…はい。ご質問していただいてありがとうございます。ちよつと合わせて私自身の感じたことも含めてお話ししていただいてよろしいでしょうか。まず、Cさんの話に関わってどういう条件の近さみたいな事を優先すれば、たとえば、いちばん有効な政策に関わるような論理になりうるかっていうご質問だったんですが、これたぶん非常に今ちよつと答えにくいなと思ってるんですけど。なぜかという、先ほど池田先生がマクロ、ミクロっていう話をされたんですが、私自身はある意味で池田先生の設定されたのとは違う意味で、マクロ、ミクロのレ

ベルの話を考えていて、一つはたしかに基本的に実証的な研究である以上なんらかの要因を確定し、それを用いて、たとえばなんらかの支援プログラムを作る、あるいは政策科学としてなんらかの物言いをしていくっていう政策科学につながるような研究の在り方っていうのが、たぶんマクロレベルというふうに私自身は考えているところがあります。他方は私自身がやり出しているというか、ある意味、唐突にんですけど、自分たちの興味にある研究だほど報告の中で、アンジェロ先生のおっしゃったことですが、自分たちの興味にある研究だけをやり続けていいのだろうかっていう問い、あれはそのまま私自身向けられていると思うようなところが実はあって、私自身の関心の中で今回のテーマも設定した傾向があって、その関心からすると、基本的に、政策科学とはちよつと別の、たとえば対面的にそういう子どもたち、青少年に対応する時の理解のあり方みたいなところを問題にできないのかっていう、そういう研究レベルの問題、問題関心はあったりします。で、その場合、直接に政策的科学的な提言にはつながらないかもしれないけれど、あえて言うとなんかそういう立場に立って、たとえばCさんの話を聞く時、そのほか、ほかの方たちの話を聞く時っていうと、代弁者になることはありえないですよ。どのような立場で、どのような方の話を聞く時もやっぱり代弁者にはなりえず、それは私自身の立場からその相手の方の話を理解するしかないわけで、

だからその意味でいうと、私の理解の検証は逆に言うところ当事者に返していくっていう必要がまず一方であるかなっていうのは最近感じるところがあつて、したがつて、Cさんの話、たとえば、条件の近さっていうのは、私はこれからまだ一回しかインタビューしてないので、何件かインタビューしていく中で、彼のケースと近いケース、何件かやったその中の近さみたいなそういう意味で、条件の近さということを考えています。したがつて、政策的にどういう有効さ持つのかっていうところとはちょっと違った形っていうのは話になるかなあつていうふうには思います。むしろその人の語りの持つている、その彼が、つまりCさんの場合で言うとその彼が、何を彼自身が目指しているのか、それを、もしかしたら本人が気づいていない観点をもしかしたら研究者の立場から指摘ができるかもしれないみたいな、そういう非常に自己形成に対するミクロな関心に基づく研究だつてところが、ひとつやっばりあるかなっていうふうに思います。そういうのはもしかしたら、今ここに出席されてる方々からするとありえないっていう問題設定っていうのになりうるのかなっていうふうにも思いつつ、今日はだから非常に話全体の、今日の議論の流れ全体、非常に重い、私にとつて重い問題提起っていうふうに受け止めていました。で、もう一つ、津村先生に対するアンジェロ先生の質問の中で『レモン』と『ヒョジョンへ』についてどう思われるかっていうのが出て

ましたけど、実はこれ私、たぶんこれ、アンジェロさんのものを読んで、この作品のこと、見たんだと思うんですけど、ただ実は探したんですが手に入らないまま、でした。『孤独なツバメ』自体は、だからもちろん、公刊されているので、そのビデオは持ってますので、今回、もう一回見直してみたんですけど、それを見ていて非常にちょっとびっくりした、特に「ことば」に着目して聞いた時にびっくりしたのは、基本的にその全員が、語っているその登場人物のほとんど全員に近い形で、物事は変わらないという、まさに諦念なんですけど、それがわりとストレートに物事は変わっていかないんだっていう事が、いろんな形で語られていて、これは非常にびっくりしました。その社会的な条件そのもの、政策条件みたいなもの、仕事におけるシステムの状況自体は変わらないっていう彼ら彼女らの認識というところが、アンジェロ先生とか、津村先生なんかからすると問題というか、だからこそ、物事は変えていけるんだと非常に強いメッセージ性として訴えるみたいなそういう先生方の研究の在り方にもつながってるのかなというふうに、一方で思いました。ただ私にとって、衝撃的だったのは、その社会的な状況の中でもとりわけ、「家族」に対しても、ほとんどどうやら変わらないというふうに、つまり、変わらないしどうしようもないことだという風に言っていて、それで結局どうなるかっていうと、社会も変わっていかない、家族のこともどうしよう

もない、だから、「私」が強くならなきゃいけないっていうメッセージ性が、非常に強く感じられて、それで、この私自身が強くならなきゃいけないって事が自己形成っていう観点からするとものすごく強いメッセージだけでも、逆に言うところ柔軟性に欠けるっていうところがあるなっていうふうには実は感じていたところがあります。で、ちょっとたぶんおそらく質問からはだいたい答えになったりかなくなっているかというふうにも思いましたけど、ちょっとこんなふうな形で答えさせていただきます。長くなりました、失礼しました。

森茂：はい、ありがとうございます。今、アンジェロさんと、鳥光先生のほうから津村先生に対していくつか質問が出ておりましたが、その事についてお願いをいたします。

まず、『孤独なツバメたち』ですが、当事者のブラジル人の人たちはどう見たか、あるいはそういう事があったのか。今日出てきた諦め、諦念、その問題ですね、その問題についていかがでしょうか。

津村：まず『孤独なツバメたち』に関しては、配給会社を通さず、本当はやっちゃいけないのかもしれませんが、ポルトガル語版と、英語版がありますので、それでたとえば浜松のカトリック教会さんとかいろんな、そういう利益にかからないグループにはどうぞという形でポルトガル語版や英語版で見えています。その時には基本的には共感していただいて

います。それはでも結局、システムではどうにもならない、当事者本人が自覚を持って打ち勝っていくしかないっていう、そのことに共感してるのかなあとというふうに、今、鳥光先生がおっしゃられたことを聞きながら思いました。特にパウラに関してはずごく強い共感が、あれこそがブラジル人なんだというような共感があります。それは一方では、ああいった人ではないとですね、つまりシステムではなくて当事者本人の意志の強さで変えていくんだというような、当事者責任にしてみました。あと、『ヒヨジョンへ』とそれから『レモン』に関してはもちろん名前だけは知っていたんですけども、同じような理由で実はまだ見れていないという事で、大変申し訳なく、どうやって見れるのかなと私も探してはみんですけども、ちょっと見れていない状況です。以上です。

森茂…ありがとうございます。ほかの参加されているかたがたからはいかががでしょうか。どんな点でもいいですが、何かあればお願いします。中澤さんから手が拳がってますかね。

中澤…はい、中澤です。中央大学大学院および浜松学院中学校の中澤と申します。津村先生、お世話になっております。ご無沙汰しております。津村先生、浜松に住みながら私が浜松のことについてちょっと質問させていただくのは非常に恐縮なんです、『孤独なツバメたち』、

私の学校の授業の中でも生徒と一緒に以前、見させていただきました。子どもたちもその当時、二〇一六年あたりの、浜松の日系ブラジル人を中心としたエスニシティな社会の在り方を私も学ばせていただきました。今日のお話では、その当時のお話がメインだったと思うんですけれども、浜松に住んでいますと、先生が調査されていた当時の街の現状と今とは、感覚的になんとなく変わってきたなあと思うのですけれども、先生の中から見た今の浜松市の日系ブラジル人やニューカマーの現状について、先生のご自身の目から見てどうなのか、ご説明していただけるとありがたいと思います。お願いいたします。

津村…森茂先生よろしいですか。

森茂…はい、どうぞ。

津村…はい、今その第二世代の青年たちが親になっていて、今、子どもたちが小学校、中学校に在籍しています。つまり第三世代の子どもたちになると思うんですけれども。スライドにも書かせていただきましたが、日本で生まれて、日本で基礎教育を受けている子どもたちにも大きな問題は問題があると思っています。つまり、アンジェロ先生も、再生産というふうにおっしゃってましたが、第三世代の子どもたちも残念ながら日本の小学校、中学校の中で同化教育を受けていく中で、母語、継承語の問題もありますけれども、第二世代の親たちよりもさ

らに僕はなかなか難しい状況になっているのかなあとというふうに実は感じてます。それで、あと僕のもう一点は、すごく怒っているのは送り出し先の政府、ブラジルの教育省だとか、なんで支援しないのかというところに対する怒りがあります。ご存じのように最近、フィリピンの子どもたちがすごく増えてますね。送り出し先と受け入れ先の教育機関、先ほど言いました二国間の移動も多いですから、このところで送り出し先の教育機関がきちんと自国の国民に対して日本の文科省と、あるいは教育委員会、市町村の教育委員会と連携してきちんとして、外国人学校の問題もありますけれども、支援していく姿勢が、アンジェロ先生のほうが詳しいと思いますが、必要なあとというふうに思っております。以上、また長くなりますので、状況に関しては変わってないですね。第三世代の子どもたちの問題はさらに複雑化し、さらに混乱していると思っております。以上です。

中澤…ありがとうございます。

森茂…ありがとうございます。ほかいかがでしょうか。もう少し時間があります。よろしいでしょうか。

津村…質問してもいいですか。

森茂…はい、どうぞ。

津村・アンジェロ先生に先ほどのつながりで、送り出し先の教育機関の責任はいつたいどうなっているのか。ブラジルに戻った子どもたちに対する支援というのが、どういうふうに行われているのか、あるいは、ここにいるデカセギの子どもたちとして滞在している時にデカセギマネーじゃなくて、なんでもう少し支援ができていないのか、支援するつもりがないのか、そのへんのところはいかがでしょうか。

アンジェロ・イシ・ご質問ありがとうございます。これは本当に複雑な要素がいろいろ絡んでいると思いますよね。というのもこの点についてずばりストレートに僕がブラジルの首都、ブラジリアの教育省などで担当者にインタビュする機会も過去にあったので聞いてみると、彼らの本音では、まずは優先順位というか、ブラジル国内のサンパウロ市とかは教育環境は充実しているとしても、いろいろな各州の学校の施設にしても、あるいは教員の質からして、国内での教育政策がひっ迫というか、充実していない中で、地球の反対側の日本にはるばる渡っている人たちの面倒なんか見る余裕がない、そんな充実した政策は優先順位としては高くできないよというのが、ずばり彼らの本音です。苦笑いしながらもその人たちの発想も一理あるなというふうに思わざるをえない部分がありましたね。さらに、在外のブラジル人は大統領選に限っては投票できるけれど、国会議員は選べないわけですよ。だから、

そこもやっぱり限界だと思っただけです。つまり、国会議員を選ぶことができれば、ブラジル国内で在外のブラジル人たちの権利だとか、より手厚い政策についても大声を出してくれる政治家を通して、もっと広くブラジルの政府にも、ブラジル社会に対しても、そういう権利の主張ができるはずなんだけど、それができないのであつて、だから大統領に一票を入れることができるという程度ではやはり声が届きにくい状況にあります。さらに厄介なことに、四年前までのいわゆる長期にわたつての労働者党の政権はわりと在外ブラジル人に対して頑張つていた。温かいまなざしで予算もつけようとしていたんですよ。それでも全然足りないのだけど、まだ目を向けていたほうです。しかし今の史上最悪のボラソナロ大統領は、日本でもコロナに対する非常にとんでもないいわゆる暴論と無策ぶりがニュースになつていくわけですが、今の政権からまったく何も望めないですよ、この在外のブラジル人に対する政策に関しては、という答えになります。

あとついでに僕が最初に鳥光先生にした質問について、ちょっとだけ補足説明させていただきたいんですけど、たぶん僕がちょっと言葉足らずで、もしかしたら変に誤解を招いてるかもしれないんですけど、僕が「有益」とか、「意味のある」比較材料と話していたのは、いわゆる政策論的というニュアンスではなくて、純粹に学問的という意味で質問していま

したので、僕から何か具体的に「当事者たち」に役立つもの（研究成果が得られること）を押し付けたり求めたりしているわけではなかったです。

森茂：ありがとうございます。そろそろ時間がきてるのですが、せっかくですのであと一問か、二問ぐらいあればお願いしたいと思いますがいかがでしょうか。それでは青木さんから手が挙がってますかね。お願いします。

青木：すみません、茨城大学の青木と言います。今日は森茂先生に誘っていただいて参加させていただきました。最初の方でアンジェロ先生がおっしゃっていた多文化共生政策の、政府の審議会などにアンジェロ先生がメンバーとして入られているけれども、なかなか意見を聞いてもらえないという話があったと思います。形だけ当事者に入ってもらって、形だけ関係者の話を聞いたふりをする。そうしますと、結局、いくら意見を言っても聞いてもらえないかっただということがあるのだらうという気がいたします。本当に聞いてもらえるためにはどうすればいいのかと思って聞いておりました。アンジェロ先生にお聞きすることではないのかもしれないんですが、何かお考えがあればお聞きしたいと思います。付け加えて、それはまた別に、コメントなんですけれども、母語保持に関して思ったのは、日本の政府は、国外では日本人学校とか補習校を、お金を出して外務省なり文科省でやっているのに、なぜ外国人を

受け入れる側になったら、受け入れている子どもたちの母語保持を考えないのか、すごく矛盾してると思いました。これはコメントです。以上です。

森茂：はい、アンジエロさん、いかがですか。

アンジエロ・イシ：ご質問ありがとうございます。まさにおっしゃった通りなのであって、たとえば直近では去年でしたか、政府が省庁横断的のほかでもない日本語教育推進法の委員会というのがあったわけです。それにも僕は声がかかってメンバーとして入ったわけです。そしてたまた会議の中で僕はまさにさっき申し上げたように日本語をとるのは当然ですけど、プラス、そういう継承語うんぬんと言ったら、それがまったく反映されない、つまり議題にもならないというような繰り返しなんですよね。大昔には外国人学校への支援なんとかに關する文科省の委員会というのが設けられて、僕に声がかかってそこに参加したら、そこで僕は、たとえば集住都市においては教育特区という形でパイロット的にポルトガル語も教える公立のバイリンガル学校を設けてはいかがですかというふうに提案するわけです。つまりこれエスニックスクールではありません。外国人学校ではなく、その公立学校に普通にクラスメイトとして地元の日本人で親がポルトガル語も覚えさせたいのならそこに通わせて、プラス、ブラジルから来ているポルトガル語話者の子どもたちが良きクラスメイトとして、育つてい

くんですよというような提案をしたわけですが、一行もそれらしき発言は議事録には残らないというようなことの繰り返しなんですよね。だから、じゃあそうならないためにはどうすればいいのか、いちばん単純でありきたりの解決法は誰かが、つまり僕ではない誰かが帰化して日本国籍を取って政治家になるということ以外ないのかなあと、冗談抜きで僕は思いますが、すけど、なかなかそうなりそうにないですね。当分はですね。

森茂…ありがとうございます。院生も何人か参加してますが、よろしいですか。それでは予定していた時間になりました。最後に突然ですが、この研究の中心になって進めて下さっている鳥光先生のほうから、何かこのあとの研究のなんか報告も含めて何かまとめの言葉を言っていただけますか。打ち合わせをしなかったので、すいません、はい。

鳥光…いやー、今日、正直、先ほど言いましたようにいろんな意味で分野違いの私が提案させていただいて、それに、その分野の中心であるお二人に話していただくということで、私にとっては本当にいい機会になりました。と同時にパンドラの箱開けたかなあみたいなどころもあって、たぶん教育哲学関係者の観点からすると、ある種具体的なテーマに近いところでBobを設定すること自体にあんまり賛成できない人もいるだろうし、逆にこの、移民教育の問題文脈でいうと私のやっていることはいったいどういう意味を持つのかを深く考えさせら

れた機会だったかなというふうに思います。今後のことは、またご相談させていただきつつ、妥協点と両方が関心を持てる路線を探しつつやっていけたらいいなというふうにも思います。今日、ご登場いただきました、アンジェロ先生、津村先生、本当にありがとうございます。今後ともちょっとこれに懲りずにまたお付き合いいただけるとありがたいかなというふうに思います。で、あの、先ほど実はアンジェロさんご質問に対して、ちょっと違う方向から答えてしまったんですけど、実は右田さんのケースもそれからCさんのケースも、両方とも被差別部落の解放に関わってる教師たちが、外国籍の、ようするに「外国にルーツを持つ」子どもたちの支援に関わるようになっていくんですが、その転換点に登場するのが二人の事例っていうところがあつて、それに対する二人の受け答えが、まったく正直言つて違うなつてというのが読んでみての感想としては私のほうにあつて、分析までやってないので印象に過ぎないのですがあつて、そういう意味ではある種、面白い事例になるかなあというふうには思っていたりはします。ちなみに右田さんの事例っていうのは、ほとんどなんか最終的には、問題を自分に向けて突きつけていって、本当の私は何、みたいなところに行くという意味では、逆に私が、別の研究テーマでやっているインタビューの事例と非常に近いような言葉、語り口みたいなのが見られたりするところもあつて。でも、本当の私っていうのは、答え

が出ないことなんですよね。で、だから、語りがなかなか安定していかないっていうところも非常に印象に残ったりしました。もう本の形になっているので、編集者の手がいぶ入っているはずなんだと思うんですけど。

池田…うん。

鳥光…ちよつと感じたりもしています。先ほど答えられない事をちよつと答えさせていただきました。

池田…うん。

鳥光…以上ですね、逆にお二人のほうで何か、おっしゃりたい事があつたら最後お声を一言ずつ言っていただければというふうに思いますけど。

津村…鳥光先生と、池田先生の、私のお考えというか、そのあまりにも特定、あるいは限定的な部分を取り上げていくことの危険性というか、むしろ彼らも成長しているわけだから、さまざまそのシステムの弊害に陥りながらも、待てよ、ほかにもいろんな部分で差別や弊害があるじゃないかと、そういうった中で鳥光先生おっしゃるような人間形成ができていくという視野を広げる意味で、あまりにもこういうふうですね、私も陥りがちなんですね。そういうところも大切にしながらも、もつと広い視野でやっぱり戦っていかなきゃいけないんだな

という部分で本当に勉強させていただきました。ありがとうございます。

鳥光…あの逆にですけども、なんでそういう事になってるかっていうと。ようするに私はやっぱり研究者の立場から考えるので、どなたかにインタビューさせていただけるかかっていうアクセスをどう確保するかという問題があつて、いつも。もしなんらかの形で津村先生のほうから、あるいはアンジェロ先生のほうから、こういう人たちだったらインタビューに応じてくれるかもしれないなご示唆があればぜひ、ぜひお願いしたいなつていうふうには思っております。ようするに池田先生しか、申し訳ないのですが、今アクセスする手立てがないというか。

池田…今のところまだ紹介は私しか、確かに紹介できてない、すみません。

鳥光…それで今そういう事になってる。で、基本的に芋ずる方式やつて、わたくし自身がほかのテーマの時もそうなんです。基本、芋ずる方式です。いちばんいいのは、その芋ずる方式でやつて、ああここまでいったら大体これでこの感じのところはつかめたなつてところまでいければ、それはいちばんいいんですけど、そこまでいくのには、ちょっと正直、ちょっと難しいかもしれないと思つています。

池田…いやいや。

鳥光…：…は、います。だからこれは、もしなんらかの形でご提案が、こういうのがありますみたいな事があつたら。

津村…それはいつでも、お申しつけください。はい。十分どこでも彼ら海外からでも応じる、何か言いたい話したい人、彼らなんで。

鳥光…というのがもしありましたら、これは本当にぜひよろしくお願いいたします。

森茂…お申しつけください。このプロジェクトの方で行くこととかなることができるような状況になったら、浜松の方にもまたお話を聞かせてもらいたいなあという話も出ています。このコロナの状況がどうなるかですけども、またその時はお願いいたします。とりあえず、こんなところでもよろしいですか。

津村…はい。あのアンジェロ先生、お久しぶりで本当に。zoomで。

アンジェロ・イシ…超お久しぶりですよ。

津村…お会いできてよかったです。勉強になりました。どうも、ありがとうございます。

池田…本当に個別のいろんなお話が聞けて私も良かったです。本当にありがとうございます。さきほど私がフランスの話をした時にも、普遍的問題として社会階層でつながるっていう部分もあるんですけど、でもやはり津村先生のお話にもあつたかと思いますが、在日ブラジル人と

しての固有性ってありますもんね。そこは本当に両方だと思っんですよね。あまり固有性ばっかりに着目するとほかとの関連が見えなくなつて、そうするとそれらは「彼らの問題」でしよつて言われてしまう。いわゆる日本人の側が自分の問題と思わなくなつてしまう。でも逆にそこと関連づけて広げていって、今度は固有が見えなくなつていくこともあつて、そのバランスなんだなあと本当にいつも感じています。こういう問題を話し合う時には、いつもそうですね。

津村…ありがとうございます。

池田…いえ、すみません。

森茂…はい、ありがとうございます。それでは私のほうからは改めて御礼申し上げます。本当に忙しい中、お二人の先生には登場していただきまして準備をしていただきました。ありがとうございます。私はお二人の先生とずいぶん以前からのお知り合いで、お話も何回か聞いたことがあるんですが、今日改めて別の視点から理解が深まったような気がします。このプロジェクトは、いちばん最初に鳥光先生がおっしゃつてくださったように五年間の計画で進めていますので、今後も続きますので、また、何かありましたらいろいろお二人に教えていただけたらと思います。今日のお二人と、あと、鳥光先生のご報告ですが、何らかの形で

残すようなこともこれから考えますが、まだこれは決定しておりませんが、その時はまたご相談させていただければと言うふうに思います。今そんなところですが、ありがとうございます。それでは長時間にわたりましたが、この人文研の公開研究会を終わりにしたいと思います。うふうに思います。ありがとうございます。

アンジェロ・ありがとうございます。

津村・ありがとうございます。

引用参考文献

一、移民を背景とする青少年の自己形成―趣旨説明に代えて

カラー, H.Ch. (二〇一八)「変容としての人間形成過程」(鳥光美緒子訳)『教育学論集』六〇

巻, 二〇五―二三二頁。

Koller, H.-Ch./Wulfrange, G. (Hg.) (2014), *Lebensgeschichte als Bildungsprozess?*

Perspektiven bildungstheoretischer Biographieforschung, Bielefeld:transcript Verlag.

右田マリアナ春美 (二〇一三)『マリアナ先生の多文化共生レッスン』明石書店。

鳥光美緒子 (二〇一八) 「成長するとはどういうことかー事例にもとづいて考える」『教育哲学研究』一一七巻、八〇―九五頁。

二、報告一 在日ブラジル人一世の研究者から見る青少年の人間形成

リリアン・テルミ・ハタノ (二〇〇九) 『マイノリティの名前はどのように扱われているのか』日本の公立学校におけるニューカマーの場合』ひつじ書房

Isli, Angelo (2003), Searching for Home, Wealth, Pride, and "Class": Japanese-Brazilians in the Land of Yen. In: Lesser, J. (ed.), *Searching for Home Abroad: Japanese Brazilians and Transnationalism*. Duke: Duke University Press. 75-102.

—— (2003), Transnational Strategies by Japanese-Brazilian Migrants in the age of IT. Goodman. In: R., Peach, C. et al. (ed.), *Global Japan: The experience of Japan's new immigrant and overseas communities*. London: Routledge Curzon.

—— (2008), Between Pride and Prejudice: Japanese-Brazilians Migrants in the "land of yen and the ancestors". In: Willis, D., Murphy-Shiguematsu, S. (ed.), *Transcultural Japan: At the borderlands of race, gender, and identity*. London: Routledge Curzon. 113-134.

—— (2017), Integrating a New Diaspora: Transnational Events by Brazilians in Japan, the

United States, and Europe. In: Rina Contini and Mariella Herold (ed.), *Living in Two Homes: Integration and Education of Transnational Migrants in a Globalized World*. Bingley: Emerald, 201-221.

イシ、アンジェロ (二〇〇七) 「在日ブラジル人家族と子どもの教育事情—コミュニティをめぐる言説と現実—」森本豊富、ドン・ナカニシ編著『越境する民と教育—異郷に育ち地球で学ぶ』アカデミア出版会／あおのみあ書齋院、四五—七四頁。

— (二〇〇七) 「在日」になったブラジル人のトランスナショナルな模索」『現代思想』6月号、一〇六—一一五頁。

— (二〇〇八) 「デカセギ移民の表象—在日ブラジル人による文学および映像表現の実践から」鶴本花織・西山哲郎・松宮朝編『トヨティズムを生きる』せりか書房、一一五—一三九頁。

— (二〇一〇) 「在日ブラジル人による表現活動の戦略と意義—音楽家の事例を中心に」駒井洋監修、中川文雄他編著『ラテンアメリカン・ディアスポラ』明石書店、二二六—二四八頁。

— (二〇一一) 「在外ブラジル人としての在日ブラジル人—ディアスポラ意識の生成過程」

日本移民学会編『学会創設20周年記念論文集 移民研究と多文化共生』御茶の水書房、二〇一一年二月二五頁。

——(二〇一六)「ジョアン・トシエイ・マスコー」第二の故郷」で挑戦する日系ブラジル人」杉田敦(編)『人々の精神史(第七巻)』岩波書店、二〇一九—二〇二〇年、一四四頁。

——(二〇一九)「移民をチーム日本に迎えるには」『在日ブラジル人1世の提言』『Journalism』二〇一九年五月号、朝日新聞社。

三、報告二 デカセギ第二世代の青少年たちと『孤独なツバメたち』のその後

松尾知明(二〇一二)『日本における多文化教育の構築に関する研究—外国人児童生徒とともに学ぶ学校教育の創造』二〇一〇—二〇一二年度科学研究費補助金研究成果報告書(二二二三三〇二二四)、国立教育研究所。

津村公博(二〇一三)「デカセギ第二世代の市民性形成への萌芽—第二世代による実践共同体」松尾知明編著『多文化教育をデザインする—移民時代のモデル構築—』勁草書房、二〇一九—二〇二〇頁。

あとがき

このブックレットは、二〇二一年一月七日に行われたオンライン公開研究会「移民を背景とする青少年の自己形成―当事者の視点、支援者の視点、研究者の視点」の報告と質疑を再構成したものである。このテーマ設定自体は、企画を担当した私自身の専門領域である教育哲学に由来する人間形成に対する理論的関心に基づく。学問的な領域をまたいで、移民研究を専門とする方々に通じる言葉を紡ぎ出せるだろうかと迷っていた私の背中を押してくれたのは、チームの森茂岳雄氏であり池田賢市氏だった。ブックレットとして記録に残すことの発案は、森茂氏による。また研究チームの眞鍋倫子氏には、「とにかく面白かった」というコメントによって、ブックレット化することの決断を後押ししていただいた。

出来上がった原稿を読み返してみても、アンジェロ・イシ氏と津村公博氏の報告がいずれも、それぞれの形で、ご自身の生き方と不可分のものとして研究を遂行されていることに気づかされ、改めて強く感銘を受けた。当事者であり研究者であるアンジェロ氏にとって、当事者性とは、たえず研究者としての彼自身を相対化し捉え直し鍛え上げていく視点、のようなものであるのだと思う。他方津村氏からは、支援する青少年に対する尊重を根底とする支援者であろうとする姿勢

を学ばせていただいた。

このブックレットのように、多数の発話者の発言から成り立っている原稿を構成するにあたっては、発話者のすべての方の同意と協力が不可欠である。また作成途上においては、さまざまに詳細な問い合わせで、中央大学研究所合同事務室の松井秀晃氏にお手を煩わせた。これらすべての方々に心から感謝します。ありがとうございました。

研究会チーム「移民を背景とする青少年の人間形成に関する日欧比較研究」を代表して

鳥光美緒子

(報告者紹介)

アンジェロ・イシ (Angelo Ishi)

武蔵大学社会学部教授。サンパウロ市生まれ。サンパウロ大学ジャーナリズム学科卒業。1990年に日本に留学、新潟大学大学院、東京大学大学院を経て、ポルトガル語新聞の編集長を務めた。日伯の移民やメディアを研究する傍ら、各省庁の移民政策関連の有識者会議で委員を務めている。

津村公博 (つむら きみひろ)

浜松学院大学現代コミュニケーション学部教授。米国オクラホマ・シティ大学大学院修了。専門は、英語教育学、第二言語習得。多文化共生をめざす多文化教育に関して実践的な研究も行っている傍ら、浜松市外国人市民共生審議会委員長、静岡県定住外国人就業・定住推進委員会委員長を歴任。

移民を背景とする青少年の自己形成—当事者の視点、支援者の視点、研究者の視点—
人文研ブックレット 41

2023年2月20日 第1刷発行

非売品

著者 研究会チーム

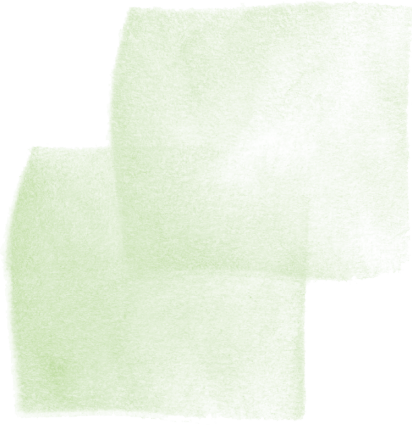
「移民を背景とする青少年の人間形成に関する
日欧比較研究」(責任者 池田賢市)

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

発行所 中央大学人文科学研究所

所長 深町英夫

☎042-674-3270



発行 中央大学人文科学研究所